

【表紙】

【提出書類】 有価証券報告書

【根拠条文】 金融商品取引法第24条第1項

【提出先】 関東財務局長

【提出日】 平成28年6月30日

【事業年度】 第27期(自平成27年4月1日 至平成28年3月31日)

【会社名】 アビックス株式会社

【英訳名】 AVIX, Inc .

【代表者の役職氏名】 代表取締役社長 熊崎友久

【本店の所在の場所】 横浜市西区みなとみらい2-2-1-1

【電話番号】 (045)670-7711(代表)

【事務連絡者氏名】 取締役管理本部本部長 桐原威憲

【最寄りの連絡場所】 横浜市西区みなとみらい2-2-1-1

【電話番号】 (045)670-7711(代表)

【事務連絡者氏名】 取締役管理本部本部長 桐原威憲

【縦覧に供する場所】 株式会社東京証券取引所
(東京都中央区日本橋兜町2番1号)

第一部 【企業情報】

第1 【企業の概況】

1 【主要な経営指標等の推移】

回次		第23期	第24期	第25期	第26期	第27期
決算年月		平成24年 3月	平成25年 3月	平成26年 3月	平成27年 3月	平成28年 3月
売上高	(千円)	1,223,093	1,309,287	800,145	867,192	739,157
経常利益又は 経常損失()	(千円)	41,069	48,578	33,325	11,569	114,156
当期純利益又は 当期純損失()	(千円)	40,119	31,265	34,275	10,233	114,460
持分法を適用した 場合の投資利益	(千円)					
資本金	(千円)	921,376	921,376	479,481	479,481	479,481
発行済株式総数	(株)	231,028	231,028	23,102,800	23,102,800	23,102,800
純資産額	(千円)	448,215	479,481	445,205	455,439	340,888
総資産額	(千円)	1,412,267	1,262,513	1,400,223	1,543,900	1,319,421
1株当たり純資産額	(円)	1,940.09	20.75	19.27	19.71	14.76
1株当たり配当額 (1株当たり中間配当額)	(円)	()	()	()	(-)	()
1株当たり当期 純利益金額又は 当期純損失金額()	(円)	173.66	1.35	1.48	0.44	4.95
潜在株式調整後 1株当たり 当期純利益金額	(円)	154.44	1.27			
自己資本比率	(%)	31.7	38.0	31.8	29.5	25.8
自己資本利益率	(%)	9.4	6.7	7.4	2.3	28.7
株価収益率	(倍)	24.7	49.29	79.5	424.4	24.6
配当性向	(%)					
営業活動による キャッシュ・フロー	(千円)	143,176	219,025	774	74,909	25,477
投資活動による キャッシュ・フロー	(千円)	5,393	5,500	20,642	994	14,968
財務活動による キャッシュ・フロー	(千円)	3,790	146,925	225,136	141,339	35,815
現金及び現金同等物 の期末残高	(千円)	421,457	488,057	691,776	757,210	680,948
従業員数	(名)	28	26	24	24	24

(注) 1 当社は連結財務諸表を作成しておりませんので、連結会計年度に係る主要な経営指標等の推移については記載しておりません。

2 売上高には消費税等は含まれておりません。

3 持分法を適用した場合の投資利益については、関連会社が存在しないため記載しておりません。

4 第25期及び第27期の潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、1株当たり当期純損失であり、また、潜在株式が存在しないため記載しておりません。また、第26期の潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

5 従業員数は、就業人員数を表示しております。

6 平成25年10月1日付で普通株式1株につき100株の割合で株式分割を行っております。第24期の期首に当該株式分割が行われたと仮定して1株当たり純資産額、1株当たり当期純利益金額又は1株当たり当期純損失金額及び潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額を算定しております。

2 【沿革】

平成元年 4月	デジタル映像の研究開発を目的として、愛知県一宮市にアビックス株式会社を設立
平成元年 7月	名古屋デザイン博覧会場外施設（名古屋交通局トンネル内）に「タイムスリット」（通過型表示装置）を実験設置
平成 2年 2月	本社を神奈川県逗子市へ移転
平成 2年 6月	西日本地区の営業力強化のため、愛知県名古屋市中村区にアビックス販売株式会社を設立
平成 4年 6月	「ウェーブライター」（手振り型表示装置）にて第 9 回全国警察装備資機材開発改善コンクール規定課題部門銀賞受賞
平成 5年 3月	アビックス販売株式会社を吸収合併
平成 5年12月	「ミラクルスリット」（視点移動型表示装置）を開発
平成 6年 1月	本社を神奈川県横浜市金沢区へ移転
平成 6年 8月	「Jリーグサポーターズライト」（サッカー応援用LED表示器具）を販売開始
平成 7年 3月	「ボールビジョン」（映像移動型表示装置）を開発
平成 7年12月	通産省特定新規事業の認定を受ける
平成 9年 3月	「ボールビジョン大型」・「クールビジョン」（青色ボールビジョン）を開発
平成10年12月	フルカラー表示装置「サイバービジョン」を開発
平成11年 7月	「ボールビジョンパレットEX」（ボールビジョン小型マルチカラータイプ）を販売開始
平成11年 7月	「A-Line(エーライン）」（LEDイルミネーションシステム）を開発
平成11年11月	渋谷QFRONTに「サイバービジョン」（名称「Q'sEYE」）を設置
平成11年11月	「ボールビジョン」にて第16回全国警察装備資機材開発改善コンクール長官賞受賞
平成12年 6月	トヨタ自動車ディーラー店舗に「サイバービジョン」（名称「IT Board」）を設置
平成13年 6月	分散オブジェクト技術(Java、HORB等のネットワーク上の分散配置を前提としたアプリケーションソフトウェア)を用いたトヨタ自動車向け映像配信システムを開発・納入
平成13年 7月	ランキンランキン(rankIngranQueen)渋谷店に「室内型サイバービジョン」を設置
平成13年12月	パチンコホール向け「パナービジョン(サイバービジョンの横長タイプ)」を設置
平成14年 9月	大手鉄道会社全16駅のホームに電光掲示器111台を設置
平成14年12月	大手鉄道会社の横浜駅に乗車口案内58台、東京駅に発車標 1 台を設置
平成15年10月	大手鉄道会社主要 6 駅（東京、名古屋、新大阪他 3 駅）に電光掲示器 6 台、乗車口案内754台、発車標70台を設置
平成16年 3月	社団法人ニュービジネス協議会主催、第14回ニュービジネス大賞最優秀賞受賞
平成16年 6月	映像コンテンツ配信サービスとして「D-Load」の運営開始
平成16年 6月	ロシア向けにボールビジョン大型のためのモジュールを販売、初の海外実績となる
平成17年 4月	株式会社ジャスダック証券取引所に株式を上場
平成18年 1月	本社を現在地（神奈川県横浜市西区）へ移転
平成18年 1月	株式会社ユー・エス・エスの運営する中古車オークション会場に「室内型サイバービジョン」（130インチ6面、110インチ6面 計 12面）を設置
平成18年10月	株式会社オプトと日本初の映像看板を利用したアフィリエイト広告事業を開発
平成18年11月	株式会社JBFパートナーズが無限責任組合員として運営管理するジャパン・ブレイクスルー・2004投資事業有限責任組合を割当先として、総額10億円の第1回及び第2回新株予約権付社債を発行
平成19年 6月	新小型電子看板の投入を発表
平成19年 8月	Jリーグ2007オールスターサッカーに当社製LED表示機（ピッチビジョン）を試験設置し、スポーツマーケットに本格進出
平成20年 2月	レンタル事業部を新設し、スポーツ・イベント向けレンタル事業を開始
平成20年 6月	株式会社JBFパートナーズが無限責任組合員として運営管理するジャパン・ブレイクスルー・2004投資事業有限責任組合を割当先として、3.5億円の第3回新株予約権付社債を発行
平成21年 6月	株式会社JBFパートナーズが無限責任組合員として運営管理するジャパン・ブレイクスルー・2004投資事業有限責任組合と資本提携契約を締結し、同社を主要割当先とした第三者割当増資により、同社の子会社となる

平成21年11月	日商エレクトロニクス株式会社と資本提携及び業務提携契約を締結し、同社を割当先として、5千万円の第4回新株予約権付社債を発行
平成22年4月	ジャスダック証券取引所と大阪証券取引所の合併に伴い、大阪証券取引所（JASDAQ市場）に株式を上場
平成22年5月	通行人数および視認者分析が可能なデジタルサイネージ向け視認者分析サービス「リアルなう」を提供開始
平成22年7月	ハイスピードLED表示システムを日本テレビ放送網株式会社、株式会社日テレ・テクニカル・リソースと共同開発
平成22年10月	「アートの表現できるLEDサインポールビジョン」を渋谷「渋谷シダックスビレッジ」に納入
平成23年3月	株式会社JBFパートナーズが無限責任組合員として運営管理するジャパン・ブレイクスルー・2004投資事業有限責任組合を割当先として、第三者割当増資による新株式（現物出資（デット・エクイティ・スワップ））を発行
平成23年5月	デジタルサイネージ用簡易映像制作エンジン「Tempo（テンポ）」を発表
平成24年9月	ホール向けワンストップ・サービス「iTempo（アイテンポ）」を発表
平成25年5月	デジタルプロモーションサービス「DPS-150」市場投入
平成25年5月	株式会社JBFパートナーズが無限責任組合員として運営管理するジャパン・ブレイクスルー・2004投資事業有限責任組合が、保有する当社株式を売却したことにより親会社に該当しなくなる
平成25年7月	東京証券取引所と大阪証券取引所の統合に伴い、東京証券取引所JASDAQ（スタンダード）に上場
平成27年3月	デジタルプロモーションサービス「DPS-150Light」市場投入
平成28年2月	サイバービジョンのシースルータイプ「GLASS VISION（グラスビジョン）」を発表

3 【事業の内容】

当社は、独自技術による目の残像効果を応用したLED(発光ダイオード)表示機を開発・販売するファブレスメーカー(製造設備等を自社で保有せず、外注先へ製造委託する業務形態をとるメーカー)であり、店舗に設置された表示機向けのコンテンツを作成して発信し、ネットワーク化することで、従来の看板やネオンサインとは異なる、全く新しい効果的な販促手段を提供しています。主たる事業は、表示機のレンタル等を行う「機器リース事業」、映像コンテンツの作成や配信、メンテナンスを行う「運営事業」、LED表示機をエンドユーザーに販売する「情報機器事業」です。

当社は、これまでオリジナリティーが高く技術的に優位性のある製品(LED表示機)を、ユーザーの自社看板という市場に対して、「映像看板」という概念のもと販売活動を展開してまいりました。

「映像看板」は、当社製品であるポールビジョン・サイバービジョンといった低価格で扱い易い表示機を用いて、映像・意匠(デザイン)を変化させることができる看板として、時間軸・環境軸に対して最適な広告映像を放映し、集客効果・購買効果を上げることを目的としています。すなわち、従来の表示看板を電子化(映像化)することにより、店名等の単純な表示だけでなく、その店舗独自の情報やお勧め商品の情報告知など、情報を入れ替えてリアルタイムにお客様に提供することで、お客様の満足度を高め、店舗の集客アップ(売上アップ)を図るものです。

当社が提案してきた「映像看板」は、販売促進のためのソリューションとして、パチンコホールを中心に利用されてきましたが、その動きはスポーツ会場、飲食チェーン店など他の業態にも広がりつつあります。

なお、当社における事業の種類別セグメントは電子広告看板の製造、販売、運営及びアフターサービスを主な事業とする単一セグメントであり、事業部門別の事業内容等は以下のとおりであります。

「機器リース事業」

当社の保有のLED表示機ix-board、DPS-150、DPS-150Lightおよびスポーツ・イベント機器を活用した販売促進支援サービスであります。

ix-board、DPS-150、DPS-150Light

ix-board、DPS-150、DPS-150Lightは、携帯電話やインターネットで行われているメールマーケティングをリアル社会で実現するツールです。エンドユーザーの携帯電話やパソコンから無線通信を利用して地域や時間軸に応じたメッセージをきめ細かく発信することで、優れた販促効果をあげることができます。この小型電子看板を利用した販促システムは、月額の利用料にて導入することが可能なサービスとなっております。取次店を中心に効率的な営業を展開することで、マーケットの裾野の拡大を図り、映像コンテンツと並ぶ安定収益の柱として育成してまいります。

スポーツ・イベント機器レンタル

スポーツマーケットやイベントマーケットを中心に当社製品をレンタル方式にて提供する事業であるスポーツ・イベントレンタルは、サッカー、バレーボール、水泳といったスポーツ会場での設置や、TV収録など各種イベントでの設置をレンタル方式にて提供するものであり、会場の状況やエンドユーザーの目的などから、当社製品ラインナップから最も適した表示機を提供しております。

各事業は相互に深い関連性をもっており、情報機器事業においてハードウェアの普及を図ることが、映像コンテンツ、メンテナンス等の運営事業の拡大につながるなど、各事業間において相乗効果が働くような運営を推進しております。

「運営事業」

LED表示機等の映像コンテンツおよびメンテナンスが中心です。

映像コンテンツ

LED表示機等のユーザーに対し、販売促進用を中心とした有益な映像コンテンツを提供する事業

メンテナンス

当社製LED表示機ユーザーに対しての施工・修理・保守等のメンテナンス事業

当社のLED表示機が普及して設置件数が増加するにしたがい、当社の重要な事業分野となっております。特に、映像コンテンツは、近年デジタルサイネージという言葉とともに、液晶テレビやプラズマテレビを中心に商業施設などで設置が増加しており、当社のLED表示機だけでなく、その他のデジタルサイネージへの映像コンテンツ提供も行っております。また、映像コンテンツは内製化によって低価格で高品質のコンテンツ提供を行っており、新サービスである簡易映像制作ソフト「TemPo、iTemPo」は、契約件数も順調に増加しております。

メンテナンスは、エンドユーザーに長く効果的にご利用いただくために、表示機付随の消耗品について定期的に交換を実施するなど、保守活動を積極的に行っております。

「情報機器事業」

当社のLED表示機を開発・販売する事業です。主な製品は次のとおりです。

サイバービジョン

目の残像効果を利用し、通常のLED表示機より少ないLEDの数で同等の画質が放映できるLED表示機です。通常のLED表示機に比べLEDの使用数を1/4に減らすなどして、その分LEDを装着していないスペースにLEDドライバー（ICチップ）等電子部品を埋め込み、非常に薄い表示機として製品化しています。サッカーグラウンド等に設置するイベント用横長LED表示機「ピッチビジョン」はこのモデルになります。

ポールビジョン

LEDによって発光するユニット（通常高さ2メートルのスティック）を等間隔に並べて、コンピュータで制御された発光パターンを一定方向に流すことにより、目の残像効果が作用して映像が認識されることを利用したLED表示機です。小型電子看板「DPS-150」、「DPS-150Light」及び「ix-board」は、ポールビジョンを小型化して通信機能を付加した製品です。

A-Line

横一列にLEDを等間隔に配置したネオンサインシステムです。コンピュータ制御により発光パターン・色を自在に演出することが可能です。

4 【関係会社の状況】

該当事項はありません。

5 【従業員の状況】

(1) 提出会社の状況

平成28年3月31日現在

従業員数(名)	平均年齢(歳)	平均勤続年数(年)	平均年間給与(千円)
24	39.7	8.1	6,084

(注) 平均年間給与は、賞与及び基準外賃金を含めております。

事業部門の名称	従業員数(名)
機器リース事業	3
運営事業	8
情報機器事業	5
全社(共通)	8
合計	24

(注) 1 従業員数は、就業人員であります。

2 当社は、単一セグメントであるため、事業部門別の従業員数を記載しております。

3 全社(共通)は、開発及び総務、経理の管理部門の就業人員数であります。

(2) 労働組合の状況

労働組合は組成されておりませんが、労使関係は円満に推移しております。

第2 【事業の状況】

1 【業績等の概要】

(1) 業績

当事業年度におけるわが国の経済は、政府による成長戦略や金融緩和を背景に企業収益や雇用・所得環境に改善がみられ、緩やかな回復基調を示したものの、中国をはじめとしたアジア新興国や資源国等における景気の下振れリスクが継続するなど、先行きが不透明な状況で推移いたしました。また、広告業界における総広告費についても、ミラノ万博、企業業績の大幅な伸長、所得増への期待があったものの、「ソチオリンピック2014」、「2014FIFAワールドカップ ブラジル大会」開催に伴う反動減、海外経済の景気減速や個人消費の伸び悩みなどが影響し、通年で前年と同水準となりました（前年比100.3%）。媒体別では、マスコミ四媒体広告費は、全て減少となりましたが、インターネット広告費は、スマートフォン・動画等を利用した広告が堅調に伸長し、全体をけん引する形となりました。屋外広告費についても、外国人観光客増加に伴う影響もあり増加しております。

このような環境の下、当社は安定的な収益が確保できる体制を強化するためローコスト体制を維持しながら、ix-boardやDPS-150といった小型表示機を活用した機器リース事業や運営事業の強化にもつなげる新規事業(SNS事業)の立ち上げを中心に展開を図ってまいりました。

当事業年度における事業別の活動と業績は以下のとおりです。

機器リース事業

ix-board、DPS-150につきましては、多言語の表現できる看板として評価され、日本国内における外国人観光客の増加に伴い、飲食店舗などを中心に契約が増加しました。

当事業年度におけるix-boardおよびDPS-150等の小型表示機の売上高は、115,215千円と前事業年度と比べ17,771千円の増加となりました。これらは、全て複数年の契約となっておりますので、次期以降も安定的な売上が見込まれます。レンタルにつきましては、大型LED表示機の長期に亘るレンタル契約が中心のため、安定的な売上を計上しております。

以上により、ix-board、DPS-150および大型表示機のレンタル等を合わせた機器リース事業と致しましては、売上高190,911千円と前事業年度と比べ13,183千円の増加となりました。

運営事業

映像コンテンツにつきましては、重要なマーケットの一つであるパチンコホール業界において様々な規制が厳しくなったことから、映像コンテンツが制限を受けることとなり、映像配信の総契約数は減少しました。このような状況の中でも、簡易映像制作ソフト「TemPo、iTemPo」が堅調に契約数を伸ばしたことや、新規事業である『SNSと大型LED表示機とを連動した広告システム』が急速に市場での認知を進めることができるなど、今後の展開が期待できる状況を構築することができたものの、映像コンテンツおよび関連ビジネスの売上高は、169,274千円と前事業年度と比べ、6,711千円の減少となりました。メンテナンスにつきましては、保守契約件数およびスポットメンテナンス件数については、ほぼ横ばいにて推移しており、売上高は165,085千円と前事業年度と比べ2,696千円減少とほぼ横ばいにて推移しました。広告媒体収入とその他の運営事業収入を合わせた売上高は、32,452千円と前事業年度と比べ2,742千円の増加となりました。

以上により、映像コンテンツ、メンテナンスを合わせた運営事業と致しましては、売上高366,812千円と前事業年度と比べ、6,665千円の減少となりました。

情報機器事業

当事業年度においては、映像コンテンツ同様パチンコホール業界において様々な規制が厳しくなったことにより、大きな金額の投資については抑制傾向が強くなり、その結果受注が減少しました。そのため、パチンコホール業界に頼った体制では大きな改善が見込めないという判断から、中国上場企業と提携し、中国製のLED表示機を扱うことといたしました。これにより、パチンコホール業界以外からの引き合いも増えており、当事業年度への貢献は小さいものの、次期以降の業績へ影響が期待できます。当事業年度の売上高は、181,433千円と前事業年度と比べ、134,553千円の減少となりました。また、中国製LED表示機を取り扱うことになったことから、従来の国内製LED表示機製品在庫を再評価し、評価減を行ったことにより売上総利益が減少しました。

次に当事業年度の販売管理費および一般管理費につきましては、人件費は242,914千円と前事業年度と比べ、16,548千円の増加となり、その他の経費としては227,697千円と5,165千円の減少となりました。これは、全社で取り組んでいる業務効率化に伴う経費削減が主な要因と考えられます。

販売管理費および一般管理費の合計と致しましては、11,383千円の増加となりました。

これらの結果、当事業年度における業績は、売上高739,157千円（前期比128,034千円減）、営業損失104,496千円（前期は営業利益19,839千円）、経常損失114,156千円（前期は経常利益11,569千円）、当期純損失114,460千円（前期は当期純利益10,233千円）となりました。

(2) 財政状態に関する分析

(資産、負債及び純資産の状況)

当期の財政状態の分析は、以下の通りです。

流動資産

当期末における流動資産の残高は、1,085,733千円（前期末比240,139千円減）となりました。これは、売掛金の減少（前期末比86,140千円減）と商品及び製品の減少（前期末比107,256千円減）及び現金及び預金が減少（前期末比76,261千円減）したことによるものです。

固定資産

当期末における固定資産の残高は、233,687千円（前期末比15,660千円増）となりました。これは、機器リース事業の拡充によりレンタル資産が増加（前期末比20,440千円増）したことによるものです。

流動負債

当期末における流動負債の残高は、347,052千円（前期末比70,376千円減）となりました。これは、支払手形の減少（前期末比59,272千円減）と未払消費税の減少（前期末比10,987千円減）によるものです。

固定負債

当期末における固定負債の残高は631,480千円（前期末比39,550千円減）となりました。これは、社債が減少（前期末比60,000千円減）したことによるものです。

純資産

当期末における純資産の残高は、340,888千円（前期末比114,550千円減）となりました。その要因は、当期純損失の計上によるものです。

(3) キャッシュ・フローの状況

当事業年度における現金および現金同等物の当期末残高は680,948千円で前期末と比べて76,261千円減少いたしました。各キャッシュ・フローの状況とそれらの要因は、以下のとおりです。

営業活動によるキャッシュ・フロー

減価償却費60,696千円の計上と売上債権の減少額70,204千円や棚卸資産の減少額51,128千円があったものの、税引前当期純損失114,156千円の計上と仕入債務の減少額64,807千円等の影響により、25,477千円の支出（前年は74,909千円の支出）となりました。

投資活動によるキャッシュ・フロー

工具、器具及び備品等の有形固定資産の取得による支出5,308千円と、ソフトウェアなど無形固定資産の取得による支出4,796千円等により、14,968千円の支出（前年は994千円の支出）となりました。

財務活動によるキャッシュ・フロー

長期借入による収入250,000千円があったものの、長期借入金の返済による支出227,736千円及び社債の償還による支出60,000千円等により、35,815千円の支出（前年は141,339千円の収入）となりました。

2 【生産、受注及び販売の状況】

(1) 生産実績

当社は電子広告看板の製造、販売、運営及びアフターサービスを主な事業とする単一セグメントであり、当事業年度の生産実績は次のとおりであります。

区分	第27期 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	
	生産高(千円)	前期比(%)
ポールビジョン大型	4,366	82.7
サイバービジョン(屋外)	100,321	33.1
A-Line	2,419	+137.5
DPS-150	5,558	87.4
その他情報機器	4,303	81.0
合計	116,970	51.9

- (注) 1 上記の金額には、消費税等は含まれておりません。
 2 上記の金額には、工事加工費が含まれております。
 3 上記の金額には、レンタル資産の製造分が含まれております。

(2) 受注実績

当社は、一部受注生産しておりますが、基本的には代理店、ユーザー等から入手する設備投資情報に基づく見込生産を行っております。

(3) 販売実績

当社は電子広告看板の製造、販売、運営及びアフターサービスを主な事業とする単一セグメントであり、当事業年度の事業別販売実績は次のとおりであります。

区分	第27期 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	
	販売高(千円)	前期比(%)
(機器リース事業収入)	190,911	+7.4
レンタル収入	75,696	5.7
ix-board	67,796	+1.8
DPS-150	47,418	+53.7
(運営事業収入)	366,812	1.8
コンテンツ収入	169,274	3.8
メンテナンス収入	165,085	1.6
広告媒体収入	19,172	+7.9
その他の運営事業収入	13,280	+11.2
(情報機器事業収入)	181,433	42.6
ポールビジョン大型	18,885	45.3
サイバービジョン(屋外)	111,133	13.4
サイバービジョン(室内)		
A-LINE	10,070	+298.0
小型		
その他情報機器事業収入	41,344	68.7
合計	739,157	14.8

- (注) 1 金額には消費税等は含まれておりません。
 2 主な相手先別の販売実績及び当該販売実績の総販売実績に対する割合

相手先	第26期 (自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)		第27期 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	
	金額(千円)	割合(%)	金額(千円)	割合(%)
株式会社セキネネオン	122,283	14.1	65,165	8.8

3 【対処すべき課題】

当社は、以下の課題に適切に対処していくことで、収益構造を抜本的に転換し、経営基盤の強化を図ります。

事業領域の拡大

既にデジタルサイネージが一般的になっているパチンコホール業界だけではなく、小売店や飲食店、カーディーラーをはじめとした幅広い業態に対し、デジタルサイネージの集客効果等を十分にアピールして、その普及に全力を挙げてまいります。新サービスであるDPS-150、DPS-150Light及びix-boardはユーザーの初期投資を抑えて導入を容易にした普及型でもあり、今後も拡大展開していく予定です。当社では、こうした事業の延長線上にネットワーク化事業を捉えており、SNSと融合することにより新しい販促手法を開拓するなど、ネットワーク化の流れの中で主要なプレーヤーとしての位置を確保したいと考えております。

在庫管理の厳正化

当期において大幅な在庫水準の引き下げを行いました。今後も引き続き在庫管理の厳正化を行い、社内ルールに基づいた適切な生産計画に沿って生産を実施してまいります。当社の製品在庫の大半は、LEDモジュールで汎用性が認められますが、営業と生産とが一層の情報交換の緊密化を図り、適切な生産量のコントロールを行うことで、在庫水準の更なる見直しと資産効率の改善を図る予定です。

ローコスト体質の継続

安定的に利益を計上できるローコスト体質を維持していくため、継続して経費の見直しを行っております。業務の効率化と集約化によって効率的な経営資源の配分を行いながら、一段の経費圧縮に取り組みます。

4 【事業等のリスク】

文中における将来に関する事項は、当事業年度末現在において当社が判断したものであります。

(1) 事業全般に関するリスクについて

ファブレス型の企業であることについて

当社は、製品の開発と品質管理に経営資源を集中し、製造についてはすべてを国内メーカーに製造委託するファブレス型のビジネスモデルを採用することにより、外部環境の変化、技術革新等への機敏な対応をとれる態勢を取っております。今後も引き続きファブレス型のビジネスモデルを採用していく予定です。

しかし、製造委託先の経営悪化、供給能力ダウン、品質問題の発生、及び受注に見合った製造委託先を確保できないこと等が発生した場合には、当社の製品出荷の遅延や、製品コスト高となる可能性があります。

法的規制について

当社の製品であるポールビジョン大型およびサイバービジョンにつきましては、その屋外での設置の際には、各都道府県の屋外広告物条例の規制を受けます。また、サイバービジョンを使用して屋外広告業を運営する場合には、各都道府県知事への届出が必要となります。そのため、これらの法的規制の変更があった場合には、当社の業績に影響を及ぼす可能性があります。

システム障害について

当社が運営事業、機器リース事業において行っている映像コンテンツや情報の配信は、通信ネットワークシステムに依存しております。自然災害や事故等により通信ネットワークが切断された場合や当社が管理運営するハードウェア及びソフトウェア等に不具合が発生した場合など、システム障害の発生によって、当社の事業活動が阻害され、業績に影響を及ぼす可能性があります。

(2) そのほか事業全般に関するリスクについて

継続企業の前提に関する重要事象等について

当社は、前事業年度及び当事業年度において、営業キャッシュ・フローのマイナスを計上し、当事業年度においては、重要な営業損失を計上致しました。このため、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせる状況が存在しておりますが、機器リース事業の展開による成長基盤の確立や全社的なコスト構造の見直しによる収益性の改善、および資本の増強による安定的な財務基盤の実現等の経営改善策を引き続き実施することにより、継続企業の前提に関する重要な不確実性は認められないものと判断しております。

5 【経営上の重要な契約等】

該当事項はありません。

6 【研究開発活動】

当社は、営業部門が顧客のニーズを把握した上で、そのニーズの実現のための総合的な開発を得意としています。すなわち、顧客が実現したい目的を総合的にとらえて、川上である素材の選択から当社独自の応用技術の付加、そして施工およびメンテナンスも含めて考えた製品開発、さらには運用のためのコンテンツのことも考えた総合的な事業開発を目的としています。

また、総合的な開発力を支える要素技術の研究開発については、残像などの人間の知覚の研究応用や刻々と進化する通信や半導体の最先端技術の応用などを外部の機関との交流や社内勉強会を通じて調査し、融合可能と思われるものについては共有の基盤技術化を進めていきます。

さらに本格的にデジタルサイネージの普及拡大が推測される情勢の中、「通信ネットワーク」を重視した商品作りを強く意識し、キャリア、機器、通信情報管理などに携わる多くの企業との協業も進めていこうと考えています。当期の研究開発費は、1,153千円であります。

なお、当社は電子広告看板の製造、販売、運営及びアフターサービスを主な事業とする単一セグメントであるため、事業の種類別セグメントに関連付けては記載しておりません。

1．基礎研究活動

(1) 知覚(視覚、聴覚)

当社のLED表示機は一般的に理解しやすい「残像」という言葉で表現される効果を利用して、解像度を上げたり、通常では見えないところに像を作ったりしていますが、近年の研究では、これは視覚系の持つ情報伝達の制御機能(網膜に入る全情報のうち、脳が処理可能な一部のみを知覚する情報抽出機能)を利用していることが解明されています。

これらの研究成果と独自の表示機制御による新しい視聴覚システムをめざし、基礎研究活動を進めております。

(2) 光

光の反射、透過、吸収、回折などの基本特性や蛍光体を使った周波数変換等の応用技術を利用して、屋外での使用で太陽光に負けない構造の検討や高コントラストと高開口率を同時に達成できる技術の研究など、光学特性の向上による表示機の高性能化に対する検討をさまざまな角度から進めており、屋外使用の製品にはその技術が反映され、高コントラストによる映像品質の向上が図られています。

(3) LED応用技術

LEDを効果的に使ったLCD用高輝度バックライトユニットや特殊照明、イルミネーションに応用できるLED点灯制御技術の開発を進めております。

2．要素技術開発活動

(1) 通信モジュール内蔵プロセッサ(VP:visual processor:映像処理装置)

デジタルサイネージ時代の本格的到来に伴い、LED表示機もメディアとしての本格的役割を果たす必要があります。当社では通信ネットワークとの親和性の高い表示機を目指し、表示機に使用されるVP自身に、様々な通信インフラに対応できる通信モジュールを内蔵させることで、製品の差別化を図ってまいります。今般市場に投入された小型情報ボード「DPS-150、DPS-150Light」にもその技術が反映されております。

(2) LEDモジュール

当社のLEDモジュールは単体での独立防水構造を採っており、薄型、軽量、堅牢さにより、全体重量の低減、設置運搬の工数削減に貢献しております。今までもLEDの輝度、色度補正の実施により表示面の均一化を図ってきましたが、さらに表示面品質の向上を図るため、配光特性や経年変化など多方面からの取り組みを行ってまいります。

(3) 画像処理

解像度圧縮、伸張

ハイビジョンなどの高精細大画面を通常技術で構成するとVPとLEDモジュール(表示部分)の間の通信帯域が1GHzを大幅に越えるものとなり、物理的に大きな空間を使用するLED大型ディスプレイに適している設計手法とはいえません。この問題を解決するためにVPとLEDモジュールの間において、画像データは圧縮されたものを使用し、LEDモジュール側で伸張するという従来にはない手法を検討しております。

ダイナミックレンジ圧縮、伸張

画像の補正や調整と同様に、輝度や色の補正・調整は、ガンマ変換で帯域圧縮された状態では正確に処理できないため、処理を行うための非圧縮化やデータを伝送するための圧縮化を独自の技術で開発しています。

3. ソフトウェア、システム開発活動

(1) 店舗向けコントロールソフト

店舗における表示機放映運営を支援するコントロールソフトを編成、編集、送付の各方面からユーザーインターフェイスやデザインも含めて見直し、ユーザーに優しく、かつ効率的な運営ができるように開発しています。

(2) 多メディア運営コントロールソフト

表示機ロケーションも視野に入れた多メディア(表示機)をコントロールするソフトの開発を開始しております。エリアや時間を意識した広告放映や、情報発信、ならびにメディア所有者、利用者(広告クライアントなど)の両者から見やすい(利用しやすい)システムを構築しデジタルサイネージ用ツールとして発展させております。

7 【財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

文中における将来に関する事項は、当事業年度末現在において当社が判断したものであります。

当期の財政状態の分析は、以下のとおりです。

(1) 財政状態の分析

財政状態の分析については、第2「事業の状況」1「業績等の概要」(2)財政状態に関する分析(資産、負債及び純資産の状況)をご参照ください。

(2) キャッシュ・フローの分析

キャッシュ・フローの分析については、第2「事業の状況」1「業績等の概要」(3)キャッシュ・フローの状況をご参照ください。

(3) 継続企業の前提に関する事項について

「第2「事業の状況」4「事業等のリスク」(2)そのほか事業全般に関するリスクについて 継続企業の前提に関する重要事象等について」に記載しております通り、前事業年度及び当事業年度において、営業キャッシュ・フローのマイナスを計上し、当事業年度においては、重要な営業損失を計上致しました。このため、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせる状況が存在しておりますが、機器リース事業の展開による成長基盤の確立や全社的なコスト構造の見直しによる収益性の改善、および資本の増強による安定的な財務基盤の実現等の経営改善策を引き続き実施してまいります。

(4) 経営成績の分析

当期における売上高は、739,157千円(前期比128,034千円減)、営業損失は104,496千円(前期は営業利益19,839千円)、経常損失は114,156千円(前期は経常利益11,569千円)、当期純損失は114,460千円(前期は当期純利益10,233千円)です。

売上高

当期の売上高は前期比128,034千円の減収となりました。

[機器リース事業収入]

(レンタル収入)

サイバービジョンやポールビジョンのレンタル収入は、75,696千円(前期比5.7%減)となりました。スポーツマーケットや商業施設などへの短期イベントレンタルについては、既存顧客との継続的な取引にとどまりました。

(ix-board)

当期におけるix-boardの売上高は、67,796千円(前期比1.8%増)となりました。複数連結の設置があったことにより、若干の増加となりました。

(DPS-150)

当期におけるDPS-150の売上高は47,418千円（前期比53.7%増）となりました。多言語表示機能が外国人観光客へのPRに奏功し、飲食店やドラッグストア、小売店などでの導入により堅調に推移しました。

これは、DPS-150に多言語表示機能を付加したことで、外国人観光客へのPRが奏功し、大手飲食チェーン店等での設置が急増したことによるものです。

[運営事業収入]

（コンテンツ収入）

コンテンツ収入の売上高は169,274千円（前期比3.8%減）となりました。重要なマーケットのひとつであるパチンコホール業界における広告規制の影響により、放映可能な映像コンテンツが制限されてしまうという厳しい環境が続くなか、映像配信の総契約数は減少しました。しかしながら、映像制作ソフト「TemPo, iTemPo」が飲食店などを中心に契約数が伸びていることや、SNSを活用した新規ビジネスの立ち上げは順調に推移いたしました。

（メンテナンス収入）

メンテナンス収入は、売上高が165,085千円（前期比1.6%減）となりました。保守契約件数及びスポットメンテナンス件数については、ほぼ横ばいにて推移しており、既存顧客を中心とした継続的な取引にとどまりました。

[情報機器事業収入]

（ボールビジョン大型）

ボールビジョン大型の売上高は18,885千円（前期比45.3%減）となりました。

ix-board、DPS-150、DPS-150Lightとの相乗効果が期待できることから、「省エネ&文字列マーケティング」の浸透に注力しておりますが、前期の急増した販売実績の反動もあり、売上高は減少となりました。

（サイバービジョン屋外）

サイバービジョン（屋外）の売上高は111,133千円（前期比13.4%減）となりました。

筐体などはそのまま、表示部分のみを簡単に安価でリニューアルできる張替え提案を既往の大口顧客へ積極的にアプローチをしものの、パチンコホール業界における投資抑制傾向が強く厳しい状況に加え、海外製製品の国内流入により、価格が減少するなど環境要因が大きく影響し売上高は減少しました。

事業別、製品群別の内訳につきましては、次のとおりです。

区分	第26期 (自 平成26年 4月 1日 至 平成27年 3月31日)	第27期 (自 平成27年 4月 1日 至 平成28年 3月31日)	前期比(%)
	売上高(千円)	売上高(千円)	
機器リース事業収入	177,728	190,911	+7.4
レンタル収入	80,284	75,696	5.7
ix-board	66,589	67,796	+1.8
DPS-150, DPS-150Light	30,854	47,418	+53.7
運営事業収入	373,477	366,812	1.8
コンテンツ収入	175,985	169,274	3.8
メンテナンス収入	167,782	165,085	1.6
広告媒体収入	17,772	19,172	+7.9
その他の運営事業収入	11,937	13,280	+11.2
情報機器収入	315,986	181,433	42.6
ボールビジョン大型	34,496	18,885	45.3
サイバービジョン(屋外)	128,257	111,133	13.4
サイバービジョン(室内)	18,000		
A-LINE	2,530	10,070	+298.0
小型	550		
その他情報機器	132,153	41,344	68.7
合計	867,192	739,157	14.8

売上原価

当期の売上原価は、373,041千円(前期比3.9%減)となりました。売上原価の減少は、たな卸資産の評価損計上により増加があったものの、売上高の減少が大きく影響したものであります。

販売費及び一般管理費

当期の販売費及び一般管理費は、人件費の増加等により、470,612千円(前期比2.5%増)となりました。

営業損益

以上のとおり、機器リース事業の増収があったものの、売上高の減少、評価損の計上により、営業損失は104,496千円(前期は営業利益19,839千円)となりました。

営業外収益、営業外費用

当期の営業外収益は、3,533千円(前期比55.4%増)となりました。また、当期の営業外費用は、支払利息10,500千円、社債利息1,211千円等により13,193千円(前期比25.1%増)となりました。

経常損益

以上のとおり、当期の経常損失は114,156千円(前期は経常利益11,569千円)となりました。

税引前当期純損益

以上により、当期の税引前当期純損失は、114,156千円(前期は税引前当期純利益11,569千円)となりました。

当期純損益

以上により、当期純損失114,460千円(前期は当期純利益10,233千円)となりました。

第3 【設備の状況】

1 【設備投資等の概要】

当社では急速な技術革新や販売競争の激化への対処と、デジタルプロモーションサービスの普及のため、機器リース事業を中心に80,715千円の設備投資を行いました。主な内訳としましては、レンタル用表示機のたな卸資産からの振替62,146千円及びリース資産のたな卸資産からの振替14,989千円であります。

なお、サイバービジョン、ix-boardにつきましては、セール・アンド・リースバック取引により売却しておりますが、係るリースバック取引がファイナンス・リース取引に該当するため、売買処理に準じた会計処理を行っております。

2 【主要な設備の状況】

平成28年3月31日現在

事業所名 (所在地)	設備の内容	帳簿価格(千円)					従業員数 (名)
		建物付属設備	工具、器具 及び備品	レンタル 資産	リース 資産	合計	
本社 (神奈川県横浜市西区)	建物付属設備、工具、器具及び備品、レンタル資産、リース資産	707	4,717	97,786	51,996	155,207	24
カシマサッカースタジアム (茨城県鹿嶋市)	工具、器具及び備品		24,447			24,447	

- (注) 1 現在休止中の主要な設備はありません。
 2 上記の金額には消費税等は含まれておりません。
 3 当社は電子広告看板の製造、販売、運営及びアフターサービスを主な事業とする単一セグメントであるため、「事業の種類別セグメントの名称」の記載を省略しております。

3 【設備の新設、除却等の計画】

当事業年度において、新たに確定した重要な設備の新設及び除却等の計画はありません。

第4 【提出会社の状況】

1 【株式等の状況】

(1) 【株式の総数等】

【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	60,000,000
計	60,000,000

【発行済株式】

種類	事業年度末現在 発行数(株) (平成28年3月31日)	提出日現在発行数(株) (平成28年6月30日)	上場金融商品取引所 名又は登録認可金融 商品取引業協会名	内容
普通株式	23,102,800	23,842,000	東京証券取引所 JASDAQ (スタンダード)	(注)
計	23,102,800	23,842,000		

(注) 権利内容に何ら限定のない当社における標準となる株式であり、単元株式数は100株であります。

(2) 【新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3) 【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4) 【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

(5) 【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (株)	発行済株式 総数残高 (株)	資本金増減額 (千円)	資本金残高 (千円)	資本準備金 増減額 (千円)	資本準備金 残高 (千円)
平成25年8月1日 (注1)		231,028	441,894	479,481	517,286	
平成25年10月1日 (注2)	22,871,772	23,102,800		479,481		

- (注1) 会社法第447条第1項の規定に基づき資本金の額を減少し、その他資本剰余金へ振り替えるとともに、会社法第448条第1項の規定に基づき、資本準備金の全額を減少し、その他資本剰余金に振り替えたものであります。
- (注2) 平成25年5月28日開催の取締役会および平成25年6月27日開催の株主総会の決議に基づき、平成25年10月1日付で普通株式1株を100株に株式分割し、単元株式数を100株とする単元株制度を採用しております。
- (注3) 平成28年5月13日に、第三者割当 発行価格 119円 資本組入額 59.5円 により、発行済株式総数が739,200株、資本金が43,982,400円及び資本準備金が43,982,400円増加しております。

(6) 【所有者別状況】

平成28年3月31日現在

区分	株式の状況(1単元の株式数100株)							単元未満株式の状況 (株)	
	政府及び 地方公共 団体	金融機関	金融商品 取引業者	その他の 法人	外国法人等		個人 その他		計
					個人以外	個人			
株主数 (人)		2	26	42	14	11	6,395	6,490	
所有株式数 (単元)		3,409	16,497	14,494	3,918	246	192,455	231,019	900
所有株式数 の割合(%)		1.47	7.14	6.27	1.69	0.11	83.31	100.00	

(7) 【大株主の状況】

平成28年3月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数 (株)	発行済株式総数に対する 所有株式数の割合(%)
熊崎友久	神奈川県三浦郡葉山町	2,316,300	10.02
時本豊太郎	神奈川県横浜市西区	1,278,000	5.53
河野芳隆	東京都港区南青山	964,900	4.17
株式会社SBI証券	東京都港区六本木1丁目6-1	511,800	2.21
インターウォーズ株式会社	東京都中央区銀座6丁目13-16 銀座ウォールビル9F	380,000	1.64
日本証券金融株式会社	東京都中央区日本橋茅場町1丁目2番 10号	340,400	1.47
日本企業投資株式会社	東京都中央区日本橋2丁目15-5 PMO日本橋二丁目8階	305,000	1.32
渡邊悦子	岡山県岡山市中区	275,600	1.19
楽天証券株式会社	東京都品川区東品川4丁目12番3号	239,600	1.03
松井証券株式会社	東京都千代田区麹町1丁目4番地	194,500	0.84
計		6,806,100	29.42

(8) 【議決権の状況】

【発行済株式】

平成28年3月31日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式			
議決権制限株式(自己株式等)			
議決権制限株式(その他)			
完全議決権株式(自己株式等)			
完全議決権株式(その他)	普通株式 23,101,900	231,019	(注)
単元未満株式	普通株式 900		
発行済株式総数	23,102,800		
総株主の議決権		231,019	

(注) 権利内容に何ら限定のない当社における標準となる株式であり、単元株式数は100株であります。

【自己株式等】

該当事項はありません。

(9) 【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

2 【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】

該当事項はありません。

(1) 【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2) 【取締役会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(3) 【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

該当事項はありません。

(4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

該当事項はありません。

3 【配当政策】

当社は、株主への利益還元を重要な経営課題とする一方、積極的な事業展開を進めるための再投資に必要な内部資金の確保を念頭に置き、経営成績、財務状況、及び配当性向を勘案した適切な配当政策を実施してまいり所存です。

当社の剰余金配当は、中間配当及び期末配当の年2回を基本的な方針としております。配当の決定機関は、中間配当は取締役会、期末配当は株主総会であります。

当期におきましては、「業績等の概要」にて記述のとおり結果であること及び繰越利益剰余金が欠損の状況であることから、経営基盤の安定を図るため無配とさせていただきます。

次期については、機器リース事業の続伸により収益構造の安定化も進むと予想しておりますが、ix-boardやDPS-150、DPS-150Lightを含む機器リース事業や運営事業における新規事業において、積極的な事業展開を進めるための再投資に必要な内部資金の確保のため、期末配当は無配とさせて頂く方針です。

なお、当社は中間配当を行うことができる旨を定款に定めております。

4 【株価の推移】

(1) 【最近5年間の事業年度別最高・最低株価】

回次	第23期	第24期	第25期	第26期	第27期
決算年月	平成24年3月	平成25年3月	平成26年3月	平成27年3月	平成28年3月
最高(円)	7,000	16,500	39,300 290	306	328
最低(円)	2,950	3,350	5,970 106	94	99

(注) 1 最高・最低株価は、平成25年7月15日以前は大阪証券取引所JASDAQ(スタンダード)におけるものであり、平成25年7月16日以降は東京証券取引所JASDAQ(スタンダード)におけるものであります。

2 印は、株式分割(平成25年10月1日、1株 100株)による権利落後の株価であります。

(2) 【最近6月間の月別最高・最低株価】

月別	平成27年10月	11月	12月	平成28年1月	2月	3月
最高(円)	167	156	180	152	144	136
最低(円)	147	136	146	107	99	118

(注) 最高・最低株価は、東京証券取引所JASDAQ(スタンダード)におけるものであります。

5 【役員の状況】

男性6名 女性0名 (役員のうち女性の比率0%)

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
代表取締役 社長		熊崎友久	昭和38年11月27日生	昭和61年4月 UFJセントラルリース株式会社(現三菱UFJリース株式会社)入社 平成2年6月 アビックス販売株式会社入社 平成5年2月 当社、アビックス販売株式会社合併により、当社営業企画部長就任 平成6年6月 取締役営業企画部長就任 平成10年6月 取締役副社長就任 平成11年6月 代表取締役社長就任 平成19年3月 取締役営業本部長就任 平成20年6月 取締役副社長就任 管理本部長就任 平成21年6月 代表取締役社長就任(現任)	(注3)	2,316,300
取締役	管理本部 本部長	桐原威憲	昭和49年3月10日生	平成14年5月 JAC Japan(現JAC Recruitment)入社 平成17年11月 当社入社 平成19年6月 当社管理本部企画総務グループ グループリーダー就任 平成21年6月 当社管理本部本部長就任(現任) 平成26年6月 当社取締役就任(現任)	(注3)	16,800
取締役		河野芳隆	昭和29年8月24日生	昭和52年4月 東京海上火災保険株式会社入社 平成12年8月 AIGジャパン・パートナーズ・ インク在日代表就任 株式会社JBFパートナーズ 代表取締役社長就任(現任) 平成16年9月 株式会社フォー・ユー(現株式会社 セカンドストリート)取締役就任 平成19年6月 当社取締役就任 平成21年6月 当社取締役会長就任 平成26年8月 当社取締役就任(現任)	(注3)	964,900

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
常勤監査役		山根正裕	昭和48年10月6日生	平成10年10月 センチュリー監査法人(現新日本有 限責任監査法人)入所 平成25年7月 山根公認会計士事務所開設 平成26年6月 当社監査役就任(現任)	(注5)	
監査役		小崎享	昭和45年7月15日生	平成6年4月 株式会社三和銀行(現株式会社三菱 東京UFJ銀行)入社 平成16年10月 株式会社JBFパートナーズ入社 平成20年6月 当社監査役就任 平成21年6月 当社取締役就任 平成25年6月 当社監査役就任(現任)	(注4)	
監査役		石川真人	昭和33年1月7日	昭和56年4月 株式会社日本債券信用銀行 (現株式会社あおぞら銀行)入社 平成12年5月 株式会社デジタルガレージ監査役就 任 平成15年3月 当社監査役就任 平成26年2月 株式会社日本流通科学情報センター 代表取締役就任 平成26年6月 当社監査役退任 株式会社旅行綜研取締役就任 平成27年6月 株式会社日本流通科学情報センター 代表取締役退任 平成28年6月 当社監査役就任(現任)	(注6)	3,000
計						3,301,000

- (注1) 取締役河野芳隆は、社外取締役であります。
 (注2) 監査役山根正裕、石川真人は、社外監査役であります。
 (注3) 平成28年3月期に係る定時株主総会の終結時から1年間。
 (注4) 平成25年3月期に係る定時株主総会の終結時から4年間。
 (注5) 平成26年3月期に係る定時株主総会の終結時から4年間。
 (注6) 平成28年3月期に係る定時株主総会の終結時から4年間。

6 【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1) 【コーポレート・ガバナンスの状況】

当社は、経営の透明性、客観性、健全性を確保し、企業価値の継続的な向上と社会から信頼される会社を実現するため、コーポレート・ガバナンスの体制強化を、経営の最重要課題の一つとして取り組んでおります。

また、当社は、株主の皆様や当社製品をご利用いただいているお客様、その他のすべてのステークホルダーに支えられていることを常に意識し、企業価値の最大化を図ることが、これらの方々の期待に応えることにつながるとの認識に立ち、事業展開を行っております。そのためには、コーポレート・ガバナンスの体制は不可欠なものであり、経営監視機能の充実に意識した運営を心がけております。

(1) 会社の機関の内容及び内部統制システムの整備の状況

会社の機関の内容

当社における、企業統治の体制は、取締役の職務の執行を監督する取締役会と、取締役会から独立した形で取締役の職務の執行を監査する監査役及び監査役会によります。

取締役会は、取締役3名（うち社外取締役1名）で構成されており、原則月1回開催の定例取締役会に加え、必要に応じて臨時取締役会を開催し、法令や定款で定められた事項や経営上の重要事項を決定しております。その他、社外取締役は重要な会議への出席などを通じて、業務執行取締役の監視や、取引全般に関する監督機能を発揮しております。

監査役会は、常勤監査役1名及び非常勤監査役2名の計3名（うち社外監査役2名）で構成されており、原則月1回開催され、臨時監査役会は必要に応じて臨時開催されております。各監査役の取締役会の出席の他、その他重要な会議への常勤監査役の出席などを通じて、取締役及び取締役会の業務執行を監視するとともに、経営全般に対する監査機能を発揮しております。

社外取締役を含めた取締役会における意思決定及び業務執行を行いながら、監査役会、内部監査委員会、会計監査人による適正な監視体制の連携がとれ、牽制機能が強化されていることにより、経営監視機能の客観性と中立性は十分に確保されていることから現状の体制を採用しております。

なお、当社は定款において、取締役の員数を10名以内、監査役の員数を4名以内と規定しております。

内部統制システムの整備の状況

当社の内部統制システムにつきましては、業種特性や会社規模などに鑑み、上記の取締役会や監査役会、その他の会議での協議を通じて、経営監視機能や部門間の相互牽制機能を確保することが最も有効であるとの認識に立ち、運営しております。

また、会社法第362条第4項第6号に基づく「取締役の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制その他株式会社の業務の適正を確保するために必要なものとして法務省令で定める体制の整備」について、以下のとおり取締役会にて決議し、取締役および従業員がコンプライアンスの重要性を認識し、リスク管理を十分踏まえたうえで、適正かつ効率的な業務運営を行うことに努めるとともに、内部統制に関する体制の整備・構築に取り組むものとしております。

1 取締役及び従業員の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制

当社は小規模組織であることからコンプライアンス専担部は設置しておりませんが、代表取締役直轄の管理本部を相談窓口とし、コンプライアンス規程並びに内部通報規程を制定いたしております。定期的に取り締役及び従業員を対象にコンプライアンス研修を実施し、内部通報規程についても、社内イントラに掲載し、定期的に電子メールにて配信、周知させ、企業文化としての一層の定着を図ります。

2 取締役の職務の執行に係る情報の保存及び管理に関する体制

当社では原則毎月1回以上開催される取締役会のほか、取締役の職務の執行に係る情報を文書取扱規程、稟議規程等に基づき適切に保存し、管理を行っています。また、取締役及び監査役は、これらの文書等を常時閲覧できる態勢としています。

3 損失の危険の管理に関する規程その他の体制

取締役・本部長等で構成するリスク管理委員会を設置し、当社業務に内在するリスクの洗い出しと、リスク極小化のための具体的方策の検討を行っています。同委員会と管理本部が中心となって規程等の整備を推進しています。

4 取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制

原則毎月1回以上の取締役会に加えて本部長・副本部長会議を随時開催して、業務全般、人事、組織等の諸問題について協議を行い、原則週1回開催されるグループリーダー会議で徹底を図ることで、迅速な意思決定と業務遂行を確保しています。

取締役を中心に構成する内部監査委員会では、業務の適切性のみならず効率性についてもチェックを行い、適宜アドバイスをを行っています。

5 当社における業務の適正を確保するための体制

新たな組織規程及び職務権限規程を明定して、権限と責任の所在を明確化いたしております。また、内部監査委員会の監査機能を強化し、業務が適正に遂行されているかのチェックを適宜行うこととしています。

6 監査役がその職務を補助すべき従業員を置くことを求めた場合における当該従業員に関する事項及びその従業員の取締役からの独立性に関する事項

監査役がその職務を補助すべき従業員を置くことを求めた場合には、取締役会は監査役会と協議し、必要に応じて補助すべき従業員を指名することとしています。

また、監査役を補助する従業員に対する指揮命令権限は、その監査業務を補助する範囲内において監査役に帰属するものとし、取締役及び他の従業員は、当該従業員に対する指揮命令権限を有しません。当該従業員の人事異動、人事評価、懲戒等の人事権に係る事項の決定には、監査役会の事前の同意を必要とするものとしています。

7 取締役及び従業員が監査役に報告するための体制その他の監査役への報告に関する体制並びに監査役の監査が実効的に行われることを確保するための体制

取締役及び従業員は、経営の重要事項を遅滞なく監査役に報告する一方で、監査役は内部統制システムや重要な意思決定のプロセス、業務の執行状況を把握するため、取締役会など重要な会議に出席するとともに、稟議書等の業務執行に係る重要な文書を閲覧し、必要に応じて取締役や従業員に対し説明を求めています。

監査役がその職務を補助すべき従業員を置くことを求めない場合には、当社管理本部が監査役との接点になって、監査業務が実効的に行われるようサポートを行っています。

内部監査及び監査役監査

管理本部長を委員長とする内部監査委員会(人員3名)を組成し、全部門を対象に必要な監査、調査を実施しており、内部監査の結果は代表取締役社長に報告しております。監査役は、内部監査委員会の会議に適宜出席するなど密接な連携を取っており、内部監査状況を監視することが可能となっております。

また、監査役と会計監査人とは、監査実施状況などについて必要に応じ適宜協議する関係にあります。会計監査人である有限責任監査法人トーマツは、国内有数の大手監査法人であり、当社は四半期毎に厳格な会計監査またはレビューを受けておりますが、その実施状況について、監査役会及び監査役に対して詳細な報告がなされております。

会計監査の状況

当社の会計監査業務を執行した公認会計士の氏名及び所属する監査法人名は、以下のとおりであります。

由水雅人(有限責任監査法人トーマツ)

倉本和芳(有限責任監査法人トーマツ)

また、当社の監査業務に係る補助者は、公認会計士 3名、その他 2名の構成となっております。

社外取締役及び社外監査役との関係

当社の社外取締役は1名であります。また、社外監査役は2名であります。

河野芳隆氏は、事業会社経営において豊富な経験や経営ノウハウを有しているとともに、映像や通信のビジネスにも精通していることから、社外取締役としての職務を適切に遂行いただけるものと判断しております。

当社との取引関係その他の利害関係はありません。

社外監査役である山根正裕氏、石川真人氏は、当社経営の健全性確保の観点から、実務経験や専門能力などを重視して選任されております。

両氏は、当社との取引関係その他の利害関係はありません。

当社は、社外取締役及び社外監査役を選任するための独立性に関する基準又は方針について、特段の定めはないものの、選任にあたっては東京証券取引所が開示を求める独立役員の独立性に関する判断基準等を参考にしております。

なお、当社は社外取締役、社外監査役との間で、当社への損害賠償責任を一定範囲に限定する契約を締結できる旨を定款で定めており、社外取締役河野芳隆氏及び社外監査役2名と次の内容の責任限定契約を締結しております。

- ・社外取締役、社外監査役が任務を怠ったことによって当社に損害賠償責任を負う場合は、会社法第427条第1項の最低責任限度額を限度として、その責任を負う。
- ・上記の責任限定が認められるのは、社外取締役、社外監査役がその責任の原因となった職務の遂行について善意でかつ重大な過失がないときに限るものとする。

(2) リスク管理体制の整備の状況

当社のリスク管理体制につきましては、取締役会や監査役会その他の会議での協議を通じまして、経営監視機能や部門間の相互牽制機能を確保しております。また、取締役・部長等で構成するリスク管理委員会を設置し、当社業務に内在するリスクの洗い出しと、リスク極小化のための具体的方策の検討を行っています。

(3) 役員の報酬等

イ 提出会社の役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数

役員区分	報酬等の総額 (千円)	報酬等の種類別の総額(千円)				対象となる 役員の員数 (名)
		基本報酬	ストック オプション	賞与	退職慰労金	
取締役 (社外取締役を除く。)	40,000	40,000				2
監査役 (社外監査役を除く。)	2,400	2,400				1
社外役員	20,760	20,760				3

ロ 提出会社の役員ごとの報酬等の総額等

報酬等の総額が1億円以上である者が存在しないため、記載しておりません。

ハ 役員の報酬等の額の決定に関する方針

当社は、役員の報酬等の額の決定に関する方針を特に定めておりませんが、株主総会で決議いただいた総額の範囲内で、取締役の職務と責任および実績に応じ、決定することにしております。

(4) 株式の保有状況

イ 保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式

銘柄数 6銘柄
貸借対照表上の合計額 5,638千円

ロ 保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式の保有区分、銘柄、株式数、貸借対照表計上額及び保有目的

(前事業年度)

該当ありません。

(当事業年度)

特定投資株式

銘柄	株式数 (株)	貸借対照表計上額 (千円)	保有目的
(株)王将フードサービス	221	765	取引関係の維持強化

(5) 取締役の選任の決議要件

当社は、取締役の選任決議要件について、議決権を行使することのできる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨を定款に定めております。また、取締役の選任決議は累積投票によらない旨を定款に定めております。

(6) 株主総会の特別決議要件

当社は、会社法第309条第2項に定める株主総会の特別決議要件について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上を持って行う旨を定款に定めております。これは、株主総会における特別決議の定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うことを目的とするものであります。

(7) 株主総会決議事項を取締役会で決議することができる事項

中間配当

当社は、株主への機動的な利益還元ができるように、会社法第454条5項の規定に基づき、取締役会の決議をもって中間配当を実施することができる旨を定款に定めております。

取締役及び監査役の実任免除

当社は、取締役及び監査役が期待される役割を十分に発揮できるように、会社法第426条第1項の規定に基づき取締役（取締役であった者を含む）及び監査役（監査役であった者を含む）の会社法第423条第1項の損害賠償責任を法令の限度において、取締役会の決議をもって免除することができる旨を定款に定めております。

(8) 自己株式の取得

当社は、自己の株式の取得について、経済情勢の変化に対応して財務政策等の経営諸施策を機動的に遂行することを可能とするため、会社法第165条第2項の規定に基づき、取締役会の決議によって市場取引等により自己の株式を取得することができる旨を定款で定めております。

(9) 反社会的勢力排除に向けた基本的な考え方及びその整備状況

当社は、社会の秩序や安全に脅威を与える反社会的勢力及び団体とは一切の関係を持たず、不当な資金の提供及び便宜供与等の不当要求に対しては毅然とした態度で対応することを基本方針とします。反社会的勢力排除に向け警察、顧問弁護士等の外部専門機関と緊密に連携し、組織全体として速やかに対応できる体制の整備を行っております。なお、万一来備え、警察、顧問弁護士等の関係を強化するとともに、神奈川県企業防衛対策協議会に入会し、研修会への定期的な参加による情報の収集、社内への周知徹底に努めております。

(2) 【監査報酬の内容等】

【監査公認会計士等に対する報酬の内容】

前事業年度		当事業年度	
監査証明業務に基づく報酬(千円)	非監査業務に基づく報酬(千円)	監査証明業務に基づく報酬(千円)	非監査業務に基づく報酬(千円)
15,500		14,500	

【その他重要な報酬の内容】

該当事項はありません。

【監査公認会計士等の提出会社に対する非監査業務の内容】

該当事項はありません。

【監査報酬の決定方針】

当社は、監査公認会計士等に対する監査報酬の決定方針を特に定めておりませんが、監査報酬の適切性について、監査日数、当社の規模及び業務の性質等を考慮し、毎事業年度検討しております。

第5 【経理の状況】

1 財務諸表の作成方法について

当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和38年大蔵省令第59号)に基づいて作成しております。

2 監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、事業年度(平成27年4月1日から平成28年3月31日まで)の財務諸表について、有限責任監査法人トーマツにより監査を受けております。

3 連結財務諸表について

当社は子会社がありませんので、連結財務諸表は作成しておりません。

4 財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みについて

当社は、財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みを行っております。具体的には、監査法人との連携や情報の共有及び社外セミナーへの参加や専門書の購読等により、会計基準等の内容を適切に把握し、又は会計基準等の変更等についての確に対応できるよう努めております。

1 【連結財務諸表等】

(1) 【連結財務諸表】

該当事項はありません。

(2) 【その他】

該当事項はありません。

2 【財務諸表等】

(1) 【財務諸表】

【貸借対照表】

(単位：千円)

	前事業年度 (平成27年 3月31日)	当事業年度 (平成28年 3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	757,210	680,948
受取手形	-	16,120
売掛金	198,386	112,245
商品及び製品	290,270	183,013
仕掛品	69	-
原材料及び貯蔵品	69,366	63,416
前渡金	1,809	22,645
前払費用	9,249	6,779
その他	122	1,106
貸倒引当金	611	543
流動資産合計	1,325,872	1,085,733
固定資産		
有形固定資産		
建物附属設備	1,229	1,229
減価償却累計額	398	521
建物附属設備（純額）	830	707
工具、器具及び備品	329,036	284,829
減価償却累計額	289,316	255,664
工具、器具及び備品（純額）	39,719	29,164
レンタル資産	145,056	179,851
減価償却累計額	67,710	82,064
レンタル資産（純額）	77,346	97,786
リース資産	91,988	96,806
減価償却累計額	34,943	44,810
リース資産（純額）	57,045	51,996
有形固定資産合計	174,941	179,654
無形固定資産		
ソフトウェア	13,752	16,263
電話加入権	951	951
無形固定資産合計	14,703	17,214
投資その他の資産		
投資有価証券	873	5,638
破産更生債権等	699	514
長期前払費用	2,195	3,792
差入保証金	24,910	24,754
その他	403	2,632
貸倒引当金	699	514
投資その他の資産合計	28,382	36,818
固定資産合計	218,027	233,687
資産合計	1,543,900	1,319,421

(単位：千円)

	前事業年度 (平成27年3月31日)	当事業年度 (平成28年3月31日)
負債の部		
流動負債		
支払手形	70,508	11,235
買掛金	22,307	16,772
1年内返済予定の長期借入金	204,336	203,480
1年内償還予定の社債	60,000	60,000
リース債務	9,032	11,545
未払金	5,607	11,590
未払費用	15,763	16,057
未払法人税等	2,522	933
未払消費税等	15,142	4,154
預り金	3,580	3,927
前受収益	6,744	7,288
製品保証引当金	156	66
その他	1,728	-
流動負債合計	417,429	347,052
固定負債		
長期借入金	472,980	496,100
社債	150,000	90,000
長期預り金	20,042	18,044
リース債務	27,720	27,127
その他	288	208
固定負債合計	671,031	631,480
負債合計	1,088,460	978,532
純資産の部		
株主資本		
資本金	479,481	479,481
利益剰余金		
その他利益剰余金		
繰越利益剰余金	24,042	138,502
利益剰余金合計	24,042	138,502
株主資本合計	455,439	340,978
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	-	90
評価・換算差額等合計	-	90
純資産合計	455,439	340,888
負債純資産合計	1,543,900	1,319,421

【損益計算書】

(単位：千円)

	前事業年度 (自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)	当事業年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)
売上高		
機器リース事業収入	177,728	190,911
運営事業収入	373,477	366,812
情報機器事業収入	315,986	181,433
売上高合計	867,192	739,157
売上原価		
機器リース事業原価	63,872	68,724
運営事業原価	110,571	131,198
製品期首たな卸高	264,100	285,742
当期製品製造原価	285,196	130,296
合計	549,297	416,039
他勘定振替高	¹ 49,874	¹ 65,187
製品期末たな卸高	285,742	177,731
情報機器事業原価	² 213,680	² 173,119
売上原価合計	388,124	373,041
売上総利益	479,068	366,115
販売費及び一般管理費	^{3, 4} 459,229	^{3, 4} 470,612
営業利益又は営業損失 ()	19,839	104,496
営業外収益		
受取利息	152	178
受取配当金	-	2
受取手数料	365	524
受取賃貸料	437	-
投資有価証券売却益	276	2,776
固定資産売却益	882	-
その他	158	52
営業外収益合計	2,273	3,533
営業外費用		
支払利息	7,562	10,500
支払保証料	998	937
社債利息	1,289	1,211
その他	692	543
営業外費用合計	10,543	13,193
経常利益又は経常損失 ()	11,569	114,156
税引前当期純利益又は税引前当期純損失 ()	11,569	114,156
法人税、住民税及び事業税	1,336	304
法人税等合計	1,336	304
当期純利益又は当期純損失 ()	10,233	114,460

【機器リース事業原価明細書】

区分	注記 番号	前事業年度 (自 平成26年 4月 1日 至 平成27年 3月31日)		当事業年度 (自 平成27年 4月 1日 至 平成28年 3月31日)	
		金額(千円)	構成比 (%)	金額(千円)	構成比(%)
材料費	1	2,952	4.6	1,491	2.2
経費		60,836	95.4	67,233	97.8
合計		63,789	100.0	68,724	100.0
他勘定受入高	2	83			
機器リース事業原価		63,872		68,724	

(注) 1 主な内訳は次のとおりであります。

前事業年度 (自 平成26年 4月 1日 至 平成27年 3月31日)		当事業年度 (自 平成27年 4月 1日 至 平成28年 3月31日)	
経費の主な内訳		経費の主な内訳	
外注費	3,617千円	外注費	3,846千円
減価償却費	42,373千円	減価償却費	46,680千円
支払手数料	14,845千円	支払手数料	16,705千円

(注) 2 他勘定受入高の内訳は次のとおりであります。

前事業年度 (自 平成26年 4月 1日 至 平成27年 3月31日)		当事業年度 (自 平成27年 4月 1日 至 平成28年 3月31日)	
他勘定受入高の内訳		他勘定受入高の内訳	
レンタル資産	83千円	レンタル資産	千円

(原価計算の方法)

当社の原価計算は、個別原価計算であります。

【運営事業原価明細書】

区分	注記 番号	前事業年度 (自 平成26年 4月 1日 至 平成27年 3月31日)		当事業年度 (自 平成27年 4月 1日 至 平成28年 3月31日)	
		金額(千円)	構成比 (%)	金額(千円)	構成比(%)
材料費	1	27,343	24.7	29,060	22.1
経費		83,227	75.3	102,138	77.9
運営事業原価		110,571	100.0	131,198	100.0

(注) 1 主な内訳は次のとおりであります。

前事業年度 (自 平成26年 4月 1日 至 平成27年 3月31日)		当事業年度 (自 平成27年 4月 1日 至 平成28年 3月31日)	
経費の主な内訳		経費の主な内訳	
外注費	70,498千円	外注費	89,227千円
減価償却費	12,486千円	減価償却費	12,772千円

(原価計算の方法)

当社の原価計算は、個別原価計算であります。

【情報機器事業製造原価明細書】

区分	注記 番号	前事業年度 (自 平成26年 4月 1日 至 平成27年 3月31日)		当事業年度 (自 平成27年 4月 1日 至 平成28年 3月31日)	
		金額(千円)	構成比(%)	金額(千円)	構成比(%)
材料費	1	149,999	52.6	67,693	52.0
経費		135,157	47.4	62,534	48.0
当期総製造費用		285,157	100.0	130,227	100.0
期首仕掛品たな卸高		108		69	
期末仕掛品たな卸高		69			
当期製品製造原価		285,196		130,296	

(注) 1 主な内訳は次のとおりであります。

前事業年度 (自 平成26年 4月 1日 至 平成27年 3月31日)		当事業年度 (自 平成27年 4月 1日 至 平成28年 3月31日)	
経費の主な内訳 外注加工費	135,157千円	経費の主な内訳 外注加工費	62,534千円

(原価計算の方法)

当社の原価計算の方法は、ロット別実際原価計算であります。

なお、個別プロジェクト案件については、個別原価計算であります。

【株主資本等変動計算書】

前事業年度(自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)

(単位：千円)

	株主資本			株主資本合計	評価・換算差額等		純資産合計
	資本金	利益剰余金			その他有価証券 評価差額金	評価・換算差額 等合計	
		その他利益剰余 金	利益剰余金合計				
当期首残高	479,481	34,275	34,275	445,205			445,205
当期変動額							
当期純利益又は当期 純損失()		10,233	10,233	10,233			10,233
株主資本以外の項目 の当期変動額(純 額)							
当期変動額合計		10,233	10,233	10,233			10,233
当期末残高	479,481	24,042	24,042	455,439			455,439

当事業年度(自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)

(単位：千円)

	株主資本			株主資本合計	評価・換算差額等		純資産合計
	資本金	利益剰余金			その他有価証券 評価差額金	評価・換算差額 等合計	
		その他利益剰余 金	利益剰余金合計				
当期首残高	479,481	24,042	24,042	455,439			455,439
当期変動額							
当期純利益又は当期 純損失()		114,460	114,460	114,460			114,460
株主資本以外の項目 の当期変動額(純 額)					90	90	90
当期変動額合計		114,460	114,460	114,460	90	90	114,550
当期末残高	479,481	138,502	138,502	340,978	90	90	340,888

【キャッシュ・フロー計算書】

(単位：千円)

	前事業年度 (自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)	当事業年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税引前当期純利益又は税引前当期純損失()	11,569	114,156
減価償却費	56,158	60,696
ソフトウェア償却費	5,278	5,434
貸倒引当金の増減額(は減少)	248	252
製品保証引当金の増減額(は減少)	78	89
受取利息及び受取配当金	152	181
支払利息	7,562	10,500
社債利息	1,289	1,211
投資有価証券売却損益(は益)	276	2,776
売上債権の増減額(は増加)	91,932	70,204
たな卸資産の増減額(は増加)	² 56,016	² 51,128
未収消費税等の増減額(は増加)	7,557	-
仕入債務の増減額(は減少)	22,904	64,807
未払金の増減額(は減少)	2,876	2,833
未払法人税等(外形標準課税)の増減額 (は減少)	1,186	557
未払消費税等の増減額(は減少)	15,142	10,987
その他	3,653	21,027
小計	65,086	12,825
利息及び配当金の受取額	152	181
利息の支払額	9,026	11,496
法人税等の支払額	950	1,336
営業活動によるキャッシュ・フロー	74,909	25,477
投資活動によるキャッシュ・フロー		
投資有価証券の取得による支出	720	24,400
投資有価証券の売却による収入	996	22,276
有形固定資産の取得による支出	1,222	5,308
有形固定資産の売却による収入	1,010	-
無形固定資産の取得による支出	1,060	4,796
その他	-	2,740
投資活動によるキャッシュ・フロー	994	14,968
財務活動によるキャッシュ・フロー		
長期借入れによる収入	350,000	250,000
長期借入金の返済による支出	156,156	227,736
社債の償還による支出	60,000	60,000
セール・アンド・リースバックによる収入	14,001	14,989
リース債務の返済による支出	6,506	13,069
財務活動によるキャッシュ・フロー	141,339	35,815
現金及び現金同等物の増減額(は減少)	65,434	76,261
現金及び現金同等物の期首残高	691,776	757,210
現金及び現金同等物の期末残高	¹ 757,210	¹ 680,948

【注記事項】

(重要な会計方針)

1 有価証券の評価基準及び評価方法

時価のあるもの

決算日の市場価格等に基づく時価法（評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定）を採用しております。

時価のないもの

移動平均法による原価法を採用しております。

2 たな卸資産の評価基準及び評価方法

(1) 製品

移動平均法による原価法（貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定）を採用しております。

ただし、ロット別管理するものはロット別移動平均法による原価法（貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定）を採用しております。

(2) 原材料

移動平均法による原価法（貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定）を採用しております。

(3) 仕掛品

個別法による原価法（貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定）を採用しております。

3 固定資産の減価償却の方法

(1) レンタル資産（リース資産を除く）

レンタル契約期間もしくはレンタル投資回収期間を償却年数とし、レンタル契約終了時もしくは稼働年数終了時の処分見積価額を残存価額とする定額法を採用しております。

(2) その他の有形固定資産（リース資産を除く）

定率法を採用しております。ただし、広告運営用として保有している資産につきましては定額法を採用しております。

なお、主な耐用年数は以下のとおりであります。

建物附属設備 15年

工具、器具及び備品 2～15年

(3) 無形固定資産（リース資産を除く）

ソフトウェア(自社利用)については、社内における利用可能期間(5年)に基づく定額法を採用しております。

(4) リース資産

所有権移転ファイナンス・リース取引に係る資産

自己所有の固定資産に適用する減価償却方法と同一の方法を採用しております。

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係る資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用しております。

(5) 長期前払費用

均等償却によっております。

4 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等の特定の債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。

(2) 製品保証引当金

当社が納入した製品の不具合に起因する特別の無償補修費用の支出に備えるため、当該金額を個別に見積もり算出した額を計上しています。

また、製品のアフターサービスの支出に備えるため、保証期間内のサービス費用見込額を過去の実績を基礎として計上しております。

5 ヘッジ会計の方法

(1) ヘッジ会計の方法

金利スワップ取引について特例処理の条件を充たしている場合には、特例処理を採用しております。

(2) ヘッジ手段とヘッジ対象

ヘッジ手段：金利変動リスクについて金利スワップ取引を利用しております。

ヘッジ対象：ヘッジ取引により金利変動が固定され、その変動が回避される資金調達取引を対象としております。

(3) ヘッジ方針

資金調達取引にかかる金利変動リスクに対して金利スワップにより特例処理の範囲内においてヘッジを行っております。

(4) ヘッジ有効性評価の方法

取引開始時に特例処理に基づく金利スワップ取引であるか評価し、特例処理に基づくスワップ取引についてのみ取引を行っております。

6 キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

キャッシュ・フロー計算書における資金(現金及び現金同等物)は、手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なりリスクしか負わない取得日から3ヶ月以内に償還期限の到来する短期投資からなっております。

7 その他財務諸表作成のための重要な事項

消費税等の処理方法

消費税等の会計処理は、税抜方式によっております。

(損益計算書関係)

1 他勘定振替高の内訳は次のとおりであります。

	前事業年度 (自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)	当事業年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)
レンタル資産	31,840千円	62,146千円
リース資産	14,001	
販売費及び一般管理費	4,032	3,041
計	49,874	65,187

2 通常の販売で保有する棚卸資産の収益性の低下による簿価切下額は、次のとおりであります。

(前事業年度)

期末たな卸高は収益性の低下に伴う簿価切下げ後の金額であり、たな卸資産評価損7,239千円が情報機器事業原価に含まれております。

(当事業年度)

期末たな卸高は収益性の低下に伴う簿価切下げ後の金額であり、たな卸資産評価損54,967千円が情報機器事業原価に含まれております。

3 販売費及び一般管理費の内訳は次のとおりであります。

(前事業年度)

販売費に属する費用のおおよその割合は13%、一般管理費に属する費用のおおよその割合は87%であります。

(当事業年度)

販売費に属する費用のおおよその割合は11%、一般管理費に属する費用のおおよその割合は89%であります。

主要な費目及び金額は次のとおりであります。

	前事業年度 (自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)	当事業年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)
役員報酬	64,260千円	63,160千円
給料手当	103,485	116,479
賞与	22,938	24,951
運賃及び荷造費	10,797	10,869
広告宣伝費	48,337	37,814
支払手数料	66,699	64,821
支払地代家賃	27,172	27,649
外注修理費	9,437	6,424
研究開発費	528	1,153
貸倒引当金繰入額	248	252
製品保証引当金繰入額	156	19
減価償却費	4,006	4,236

4 研究開発費の総額

	前事業年度 (自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)	当事業年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)
一般管理費に含まれる研究開発費	528千円	1,153千円

(株主資本等変動計算書関係)

前事業年度(自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)

1 発行済株式に関する事項

株式の種類	当事業年度期首	増加	減少	当事業年度末
普通株式(株)	23,102,800			23,102,800

2 自己株式に関する事項

該当事項はありません。

3 新株予約権等に関する事項

該当事項はありません。

4 配当に関する事項

該当事項はありません。

当事業年度(自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)

1 発行済株式に関する事項

株式の種類	当事業年度期首	増加	減少	当事業年度末
普通株式(株)	23,102,800			23,102,800

2 自己株式に関する事項

該当事項はありません。

3 新株予約権等に関する事項

該当事項はありません。

4 配当に関する事項

該当事項はありません。

(キャッシュ・フロー計算書関係)

1 現金及び現金同等物の期末残高と貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	前事業年度	当事業年度
	(自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)	(自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)
現金及び預金勘定	757,210千円	680,948千円
現金及び現金同等物	757,210千円	680,948千円

2 たな卸資産の増減額に含まれる振替金額

(前事業年度)

営業活動によるキャッシュ・フローのたな卸資産の増減額からは、たな卸資産からレンタル資産への振替金額31,840千円、たな卸資産からリース資産への振替金額14,001千円、レンタル資産からたな卸資産への振替金額207千円が除外されています。

(当事業年度)

営業活動によるキャッシュ・フローのたな卸資産の増減額からは、たな卸資産からレンタル資産への振替金額62,146千円が除外されています。

(リース取引関係)

1 ファイナンス・リース取引

(借主側)

所有権移転ファイナンス・リース取引

リース資産の内容

- ・有形固定資産 主として、映像表示機器(レンタル資産)であります。

リース資産の減価償却方法

自己所有の固定資産に適用する減価償却方法と同一の方法を採用しております。

所有権移転外ファイナンス・リース取引

リース資産の内容

- ・有形固定資産 主として、映像表示機器(レンタル資産)であります。

リース資産の減価償却方法

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用しております。

(金融商品関係)

前事業年度(自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)

1 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社は、主にLED表示機の製造販売事業を行うための設備投資計画に照らして、必要な資金（主に銀行借入や社債発行）を調達しております。一時的な余資は主に安全性の高い金融資産で運用し、また、短期的な運転資金を銀行借入により調達しております。デリバティブは、後述するリスクを回避するために利用しており、投機的な取引は行わない方針であります。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク

営業債権である売掛金は、顧客の信用リスクに晒されております。差入保証金は、建物賃貸借契約に係るものであり、差入先の信用リスクに晒されております。

営業債務である支払手形、買掛金は、1年以内の支払期日であります。また、営業債務は、資金調達に係る流動性リスクに晒されています。

借入金、社債及びファイナンス・リースに係るリース債務は、主に運転資金と設備投資に係る資金調達を目的としたものであり、借入金の返済期限は最長で決算日後5年、社債の償還期限は最長で決算日後4年、リース債務の償還日は最長で決算日後5年であります。このうち一部は、金利の変動リスクに晒されておりますが、デリバティブ取引(金利スワップ取引)を利用してヘッジしております。

(3) 金融商品に係るリスク管理体制

信用リスク（取引先の契約不履行等に係るリスク）の管理

営業債権については、取引権限を定めた社内規程に則り、受注前に取引先の状況を確認し、取引相手ごとに期日及び残高を管理するとともに、財務状況等の悪化等による回収懸念の早期把握や軽減を図っております。

デリバティブ取引については、信用リスクを軽減するために格付の高い金融機関とのみ取引を行っております。

市場リスク（為替や金利等の変動リスク）の管理

投資有価証券については、財務状況等を把握し、保有状況を継続的に見直しております。

デリバティブ取引の執行・管理については、取引権限や取引限度額等を定めた管理規程に従い、担当部署が決裁担当者の承認を得て行なっております。

資金調達に係る流動性リスク（支払期日に支払を実行できなくなるリスク）の管理

管理部門が毎月資金繰計画を作成・更新するとともに、手許流動性の維持などにより流動性リスクを管理しております。

(4) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合には合理的に算定された価額が含まれております。当該価額の算定においては変動要因を織り込んでいるため、異なる前提条件等を採用することにより、当該価額が変動することがあります。

2 金融商品の時価等に関する事項

平成27年3月31日における貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。なお、時価を把握することが極めて困難と認められるものは、次表には含まれていません（注2）を参照ください。）。

	貸借対照表計上額 (千円)	時価 (千円)	差額 (千円)
(1) 現金及び預金	757,210	757,210	
(2) 売掛金	198,386	198,386	
(3) 破産更生債権等 貸倒引当金(1)	699 699		
(4) 差入保証金	24,910	24,477	433
資産計	980,508	980,074	433
(1) 支払手形	70,508	70,508	
(2) 買掛金	22,307	22,307	
(3) 未払金	5,607	5,607	
(4) 未払費用	15,763	15,763	
(5) 未払法人税等	2,522	2,522	
(6) 未払消費税等	15,142	15,142	
(7) 預り金	3,580	3,580	
(8) 長期借入金(2)	677,316	678,830	1,514
(9) 社債(3)	210,000	210,113	113
(10) 長期預り金	20,042	20,015	26
(11) リース債務(4)	36,752	36,245	507
負債計	1,079,542	1,080,637	1,094
デリバティブ取引			

- (1) 破産更生債権等に個別に計上している貸倒引当金は控除しております。
(2) 1年内返済予定の長期借入金を含めております。
(3) 1年内償還予定の社債を含めております。
(4) リース債務には、1年内に期限の到来する金額を含めております。

(注1) 金融商品の時価の算定方法並びに有価証券取引に関する事項及びデリバティブ取引に関する事項

資産

(1) 現金及び預金、(2) 売掛金

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。

(3) 破産更生債権等

破産更生債権等については、担保及び保証による回収見込額等に基づいて貸倒見積高を算定しているため、時価は決算日における貸借対照表価額から現在の貸倒見積高を控除した金額に近似しており、当該価額をもって時価としております。

(4) 差入保証金

主に建物の賃借時に差入れている保証金であり、契約期間に基づき、安全性の高い長期の債券の利回りで割り引いた現在価値により算定しております。

負債

(1) 支払手形、(2) 買掛金、(3) 未払金、(4) 未払費用、(5) 未払法人税等、(6) 未払消費税等、(7) 預り金

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。

(8) 長期借入金

時価については、元利金の合計額を、新規に同様の借り入れを行った場合に想定される利率で割り引いた現在価値により算定しております。

(9) 社債

時価については、元利金の合計額を、新規に同様の社債を発行した場合に想定される利率で割り引いた現在価値により算定しております。

(10) 長期預り金

レンタル契約時に預け入れられる保証金であり、契約満了までの期間に基づき、安全性の高い長期の債券の利回りで割り引いた現在価値により算定しております。

(11) リース債務

時価については、元利金の合計額を、新規に同様のリース取引を行った場合に想定される利率で割り引いた現在価値により算定しております。

デリバティブ取引

金利スワップの特例処理によるものは、ヘッジ対象とされている長期借入金と一体として処理されているため、その時価は、当該長期借入金の時価に含めて記載しております。

(注2) 時価を把握することが困難と認められる金融商品

区分	貸借対照表計上額(千円)
非上場株式(1)	873

(1)非上場株式は、市場価格がなく、かつ将来キャッシュ・フローを見積ることができず、時価を把握することが極めて困難と認められるため、時価開示の対象とはしておりません。

(注3) 金銭債権の決算日後の償還予定額

	1年以内 (千円)	1年超5年以内 (千円)
売掛金	198,386	
差入保証金		24,910
合計	198,386	24,910

破産更生債権等は、回収時期を合理的に見込むことができないため、上表には記載しておりません。

(注4) 社債、長期借入金、リース債務及びその他の有利子負債の決算日後の返済予定額

区分	1年以内 (千円)	1年超 2年以内 (千円)	2年超 3年以内 (千円)	3年超 4年以内 (千円)	4年超 5年以内 (千円)
社債	60,000	60,000	60,000	30,000	
長期借入金	204,336	153,280	148,050	107,550	64,100
リース債務	9,032	9,155	9,410	7,260	1,893

当事業年度(自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)

1 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社は、主にLED表示機の製造販売事業を行うための設備投資計画に照らして、必要な資金（主に銀行借入や社債発行）を調達しております。一時的な余資は主に安全性の高い金融資産で運用し、また、短期的な運転資金を銀行借入により調達しております。デリバティブは、後述するリスクを回避するために利用しており、投機的な取引は行わない方針であります。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク

営業債権である売掛金は、顧客の信用リスクに晒されております。差入保証金は、建物賃貸借契約に係るものであり、差入先の信用リスクに晒されております

投資有価証券は、主に業務上の関係を有する企業の様式であり、市場価格の変動リスクに晒されております。当該リスクに関しては、四半期ごとに時価の把握を行っております。

営業債務である支払手形、買掛金は、1年以内の支払期日であります。また、営業債務は、資金調達に係る流動性リスクに晒されています。

借入金、社債及びファイナンス・リースに係るリース債務は、主に運転資金と設備投資に係る資金調達を目的としたものであり、借入金の返済期限は最長で決算日後5年、社債の償還期限は最長で決算日後3年、リース債務の償還日は最長で決算日後5年であります。このうち一部は、金利の変動リスクに晒されておりますが、デリバティブ取引(金利スワップ取引)を利用してヘッジしております。

(3) 金融商品に係るリスク管理体制

信用リスク（取引先の契約不履行等に係るリスク）の管理

営業債権については、取引権限を定めた社内規程に則り、受注前に取引先の状況を確認し、取引相手ごとに期日及び残高を管理するとともに、財務状況等の悪化等による回収懸念の早期把握や軽減を図っております。

デリバティブ取引については、信用リスクを軽減するために格付の高い金融機関とのみ取引を行っております。

市場リスク（為替や金利等の変動リスク）の管理

投資有価証券については、財務状況等を把握し、保有状況を継続的に見直しております。

デリバティブ取引の執行・管理については、取引権限や取引限度額等を定めた管理規程に従い、担当部署が決裁担当者の承認を得て行なっております。

資金調達に係る流動性リスク（支払期日に支払を実行できなくなるリスク）の管理

管理部門が毎月資金繰計画を作成・更新するとともに、手許流動性の維持などにより流動性リスクを管理しております。

(4) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合には合理的に算定された価額が含まれております。当該価額の算定においては変動要因を織り込んでいるため、異なる前提条件等を採用することにより、当該価額が変動することがあります。

2 金融商品の時価等に関する事項

平成28年3月31日における貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。なお、時価を把握することが極めて困難と認められるものは、次表には含まれていません（（注2）を参照ください。）。

	貸借対照表計上額 (千円)	時価 (千円)	差額 (千円)
(1) 現金及び預金	680,948	680,948	
(2) 受取手形	16,120	16,120	
(3) 売掛金	112,245	112,245	
(4) 破産更生債権等 貸倒引当金 (1)	514 514		
(5) 差入保証金	24,754	24,567	187
資産計	834,070	833,882	187
(1) 支払手形	11,235	11,235	
(2) 買掛金	16,772	16,772	
(3) 未払金	11,590	11,590	
(4) 未払費用	16,057	16,057	
(5) 未払法人税等	933	933	
(6) 未払消費税等	4,154	4,154	
(7) 預り金	3,927	3,927	
(8) 長期借入金 (2)	699,580	703,691	4,111
(9) 社債 (3)	150,000	150,114	114
(10) 長期預り金	18,044	18,095	51
(11) リース債務 (4)	38,672	38,130	541
負債計	970,969	974,705	3,736
デリバティブ取引			

- (1)破産更生債権等に個別に計上している貸倒引当金は控除しております。
(2)1年内返済予定の長期借入金を含めております。
(3)1年内償還予定の社債を含めております。
(4)リース債務には、1年以内に期限の到来する金額を含めております。

(注1) 金融商品の時価の算定方法並びに有価証券取引に関する事項及びデリバティブ取引に関する事項

資産

- (1) 現金及び預金、(2)受取手形、(3)売掛金

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。

- (4) 破産更生債権等

破産更生債権等については、担保及び保証による回収見込額等に基づいて貸倒見積高を算定しているため、時価は決算日における貸借対照表価額から現在の貸倒見積高を控除した金額に近似しており、当該価額をもって時価としております。

- (5) 差入保証金

主に建物の賃借時に差入れている保証金であり、契約期間に基づき、安全性の高い長期の債券の利回りで割り引いた現在価値により算定しております。

負債

- (1)支払手形、(2)買掛金、(3)未払金、(4)未払費用、(5)未払法人税等、(6)未払消費税等、(7)預り金

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。

- (8)長期借入金

時価については、元利金の合計額を、新規に同様の借り入れを行った場合に想定される利率で割り引いた現在価値により算定しております。

- (9)社債

時価については、元利金の合計額を、新規に同様の社債を発行した場合に想定される利率で割り引いた現在価値により算定しております。

- (10)長期預り金

レンタル契約時に預け入れられる保証金であり、契約満了までの期間に基づき、安全性の高い長期の債券の利回りで割り引いた現在価値により算定しております。

(11)リース債務

時価については、元利金の合計額を、新規に同様のリース取引を行った場合に想定される利率で割り引いた現在価値により算定しております。

デリバティブ取引

金利スワップの特例処理によるものは、ヘッジ対象とされている長期借入金と一体として処理されているため、その時価は、当該長期借入金の時価に含めて記載しております。

(注2) 時価を把握することが困難と認められる金融商品

区分	貸借対照表計上額(千円)
非上場株式(1)	4,873

(1)非上場株式は、市場価格がなく、かつ将来キャッシュ・フローを見積ることができず、時価を把握することが極めて困難と認められるため、時価開示の対象とはしておりません。

(注3) 金銭債権の決算日後の償還予定額

	1年以内 (千円)	1年超5年以内 (千円)
受取手形	16,120	
売掛金	112,245	
差入保証金		24,754
合計	128,366	24,754

破産更生債権等は、回収時期を合理的に見込むことができないため、上表には記載しておりません。

(注4) 社債、長期借入金、リース債務及びその他の有利子負債の決算日後の返済予定額

区分	1年以内 (千円)	1年超 2年以内 (千円)	2年超 3年以内 (千円)	3年超 4年以内 (千円)	4年超 5年以内 (千円)
社債	60,000	60,000	30,000		
長期借入金	203,480	172,400	183,600	114,300	25,800
リース債務	11,545	11,848	9,770	4,478	1,030

(有価証券関係)

前事業年度(平成27年3月31日現在)

重要性が乏しいため記載を省略しております。

当事業年度(平成28年3月31日現在)

重要性が乏しいため記載を省略しております。

(デリバティブ取引関係)

前事業年度(自平成26年4月1日至平成27年3月31日)

1.ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引

(1)通貨関連

該当事項はありません。

(2)金利関連

ヘッジ会計の方法	デリバティブ取引の種類等	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超 (百万円)	時価 (百万円)
金利スワップの特例処理	金利スワップ取引 支払固定・受取変動	長期借入金	405,000	315,000	(注)

(注)金利スワップの特例処理によるものは、ヘッジ対象とされている借入金と一体として処理されているため、その時価は当該借入金の時価に含めて記載しております。

当事業年度(自平成27年4月1日至平成28年3月31日)

1. ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引

(1) 通貨関連

該当事項はありません。

(2) 金利関連

ヘッジ会計の方法	デリバティブ取引の種類等	主なヘッジ対象	契約額等(百万円)	契約額等のうち1年超(百万円)	時価(百万円)
金利スワップの特例処理	金利スワップ取引 支払固定・受取変動	長期借入金	495,000	365,000	(注)

(注) 金利スワップの特例処理によるものは、ヘッジ対象とされている借入金と一体として処理されているため、その時価は当該借入金の時価に含めて記載しております。

(退職給付関係)

1. 採用している退職給付制度の概要

当社は、確定拠出型の制度として、中小企業退職金共済法に基づく中小企業退職金共済制度に加入しております。

2. 確定拠出制度

当社の確定拠出制度への要拠出額は、前事業年度7,770千円、当事業年度8,040千円であります。

(税効果会計関係)

(1) 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (平成27年3月31日)	当事業年度 (平成28年3月31日)
繰延税金資産(流動)		
未払事業税	392千円	228千円
未払賞与	4,853	4,247
棚卸資産評価損	64,390	71,942
製品保証引当金	51	20
貸倒引当金	412	262
貯蔵品	1,045	954
繰延税金資産(流動)小計	71,146	77,655
評価性引当額	71,146	77,655
繰延税金資産(流動)合計		
繰延税金資産(固定)		
減価償却費償却限度超過額	281	1,403
繰越欠損金	298,114	282,126
出資金	3,310	3,027
ゴルフ会員権	126	115
資産除去債務	809	787
減損損失	5	5
繰延税金資産(固定)小計	302,647	287,465
評価性引当額	302,647	287,465
繰延税金資産(固定)合計		
繰延税金資産合計		

(2) 法定実効税率と税効果適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前事業年度 (平成27年3月31日)	当事業年度 (平成28年3月31日)
法定実効税率	35.3 %	%
(調整)		
交際費等永久に損金に 算入されない項目	13.2 %	%
住民税均等割	8.5 %	%
評価性引当額の増減	46.8 %	%
その他	1.3 %	%
税効果会計適用後の法人税等の 負担率	11.5 %	%

(注)当事業年度は、税引前当期純損失を計上しているため、記載を省略しております。

(ストック・オプション等関係)

前事業年度(自平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)

該当事項はありません。

当事業年度(自平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)

該当事項はありません。

(持分法損益等)

前事業年度(自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)

関連会社が存在しないため、記載しておりません。

当事業年度(自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)

関連会社が存在しないため、記載しておりません。

(資産除去債務関係)

前事業年度(自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)

当事業年度におきましては、金額的重要性が低いため、注記を省略しております。

当事業年度(自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)

当事業年度におきましては、金額的重要性が低いため、注記を省略しております。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

前事業年度(自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)

報告セグメントの概要

当社は電子広告看板の製造、販売、運営及びアフターサービスを主な事業とする単一セグメントであるためセグメント情報は記載しておりません。

当事業年度(自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)

報告セグメントの概要

当社は電子広告看板の製造、販売、運営及びアフターサービスを主な事業とする単一セグメントであるためセグメント情報は記載しておりません。

【関連情報】

前事業年度(自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)

1 製品及びサービスごとの情報

(単位：千円)

	機器リース事業収入	運営事業収入	情報機器事業収入	合計
外部顧客への売上高	177,728	373,477	315,986	867,192

2 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦の外部顧客への売上高がないため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

本邦以外に所在している有形固定資産がないため、記載を省略しております。

3 主要な顧客ごとの情報

(単位：千円)

顧客の名称又は氏名	売上高
株式会社セキネネオン	122,283

当社は電子広告看板の製造、販売、運営及びアフターサービスを主な事業とする単一セグメントであるためセグメント名の記載を省略しております。

当事業年度(自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)

1 製品及びサービスごとの情報

(単位：千円)

	機器リース事業収入	運営事業収入	情報機器事業収入	合計
外部顧客への売上高	190,911	366,812	181,433	739,157

2 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦の外部顧客への売上高がないため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

本邦以外に所在している有形固定資産がないため、記載を省略しております。

3 主要な顧客ごとの情報

外部顧客への売上高のうち、損益計算書の売上高の10%以上を占める相手先がないため、記載はありません。

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

前事業年度(自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)

該当事項はありません。

当事業年度(自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)

該当事項はありません。

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

前事業年度(自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)

該当事項はありません。

当事業年度(自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)

該当事項はありません。

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

前事業年度(自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)

該当事項はありません。

当事業年度(自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)

該当事項はありません。

【関連当事者情報】

前事業年度（自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日）

1．関連当事者との取引

財務諸表提出会社と関連当事者の取引
該当事項はありません。

2．親会社又は重要な関連会社に関する注記

（1）親会社情報

該当事項はありません。

（2）重要な関連会社の要約財務諸表

該当事項はありません。

当事業年度（自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日）

1．関連当事者との取引

財務諸表提出会社と関連当事者の取引
該当事項はありません。

2．親会社又は重要な関連会社に関する注記

（1）親会社情報

該当事項はありません。

（2）重要な関連会社の要約財務諸表

該当事項はありません。

(1株当たり情報)

項目	前事業年度 (自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)	当事業年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)
1株当たり純資産額	19円71銭	14円76銭
1株当たり当期純利益金額又は 当期純損失金額()	0円44銭	4円95銭

(注) 1. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益は、前事業年度については潜在株式が存在しないため、当事業年度については当期純損失であり、また潜在株式が存在しないため、記載していません。

2. 1株当たり純資産額の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

項目	前事業年度 (平成27年3月31日)	当事業年度 (平成28年3月31日)
貸借対照表の純資産の部の合計額(千円)	455,439	340,888
普通株式に係る純資産額(千円)	455,439	340,888
差額の主な内訳(千円)		
普通株式の発行済株式数(株)	23,102,800	23,102,800
普通株式の自己株式数(株)		
1株当たり純資産額の算定に用いられた普通株式の数(株)	23,102,800	23,102,800

3. 1株当たり当期純利益金額又は1株当たり当期純損失の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

項目	前事業年度 (自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日)	当事業年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)
1株当たり当期純利益金額又は 当期純損失金額()		
当期純利益金額又は 当期純損失金額()(千円)	10,233	114,460
普通株主に帰属しない金額(千円)		
普通株式に係る当期純利益金額 又は当期純損失金額()(千円)	10,233	114,460
普通株式の期中平均株式数(株)	23,102,800	23,102,800

(重要な後発事象)

第三者割当増資について

当社は、平成28年4月25日開催の取締役会において、下記のとおり、第三者割当により新株を発行することを決議し、平成28年5月13日に払込が完了しています。

発行株式の種類及び数	当社普通株式	739,200株
募集株式の払込金額	1株につき119円	
払込金額の総額	87,964,800円	
増加する資本金及び 資本準備金の額	増加する資本金の額	43,982,400円
	増加する資本準備金の額	43,982,400円
払込期日	平成28年5月13日	
割当方法	特定の第三者に割り当てる	
資金使途	事業資金	

【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

資産の種類	当期首残高 (千円)	当期増加額 (千円)	当期減少額 (千円)	当期末残高 (千円)	当期末減価 償却累計額 又は償却 累計額(千円)	当期償却額 (千円)	差引当期末 残高 (千円)
有形固定資産							
建物附属設備	1,229			1,229	521	123	707
工具、器具及び備品	329,036	3,579	47,786	284,829	255,664	14,007	29,164
レンタル資産	145,056	62,146	27,351	179,851	82,064	26,527	97,786
リース資産	91,988	14,989	10,171	96,806	44,810	20,038	51,996
有形固定資産計	567,310	80,715	85,309	562,717	383,062	60,696	179,654
無形固定資産							
ソフトウェア	32,775	7,946	4,506	36,214	19,951	5,434	16,263
電話加入権	951			951			951
無形固定資産計	33,726	7,946	4,506	37,165	19,951	5,434	17,214
長期前払費用	2,195	2,069	472	3,792			3,792

(注) 1 当期増加額のうち主なものは次のとおりであります。

レンタル資産	レンタル用表示機	ix-board	42,308千円
リース資産	レンタル用表示機	サイバービジョン	11,355千円

2 当期減少額のうち主なものは次のとおりです。

工具、器具及び備品	生産用治具、金型等	サイバービジョン	33,986千円
レンタル資産	レンタル用表示機	サイバービジョン	23,528千円

【社債明細表】

銘柄	発行年月日	当期首残高 (千円)	当期末残高 (千円)	利率 (%)	担保	償還期限
第9回無担保社債	平成25年 8月9日	210,000 (60,000)	150,000 (60,000)	0.58	無担保	平成30年 7月31日
合計		210,000 (60,000)	150,000 (60,000)			

(注) 1 当期首残高及び当期末残高の()書は1年以内償還予定金額となっております。

2 貸借対照表日後5年以内における1年ごとの償還予定額の総額

1年以内 (千円)	1年超2年以内 (千円)	2年超3年以内 (千円)	3年超4年以内 (千円)	4年超5年以内 (千円)
60,000	60,000	30,000		

【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (千円)	当期末残高 (千円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金				
1年以内に返済予定の長期借入金	204,336	203,480	1.31	
1年以内に返済予定のリース債務	9,032	11,545	0.25	
長期借入金(1年以内に返済予定のものを除く。)	472,980	496,100	1.30	平成30年7月2日から平成32年10月31日まで
リース債務(1年以内に返済予定のものを除く。)	27,720	27,127	0.25	平成30年10月20日から平成32年8月31日まで
その他有利子負債				
合計	714,068	738,252		

- (注) 1 平均利率については、期末借入金残高及び期末リース債務残高に対する加重平均利率を記載しております。
2 長期借入金及びリース債務(1年以内に返済予定のものを除く)の貸借対照表日後5年内における1年ごとの返済予定額の総額

区分	1年超2年以内 (千円)	2年超3年以内 (千円)	3年超4年以内 (千円)	4年超5年以内 (千円)
長期借入金	172,400	183,600	114,300	25,800
リース債務	11,848	9,770	4,478	1,030

【引当金明細表】

区分	当期首残高(千円)	当期増加額(千円)	当期減少額 (目的使用) (千円)	当期減少額 (その他) (千円)	当期末残高(千円)
貸倒引当金	1,310	208		460	1,058
製品保証引当金	156	66	109	47	66

- (注) 1 貸倒引当金の当期減少額の「その他」は、一般債権の貸倒実績率による洗替額と破産更生債権等の回収額であります。
2 製品保証引当金の当期減少額の「その他」は、洗替によるものであります。

【資産除去債務明細表】

当事業年度期首及び当事業年度末における資産除去債務の金額が当事業年度期首及び当事業年度末における負債及び純資産の合計額の100分の1以下であるため、記載を省略しております。

(2) 【主な資産及び負債の内容】

a 資産の部

イ 現金及び預金

区分	金額(千円)
現金	23
預金	
当座預金	344
普通預金	680,530
別段預金	50
計	680,925
合計	680,948

ロ 受取手形

(イ) 相手先別内訳

相手先	金額(千円)
株式会社キクテック	155
株式会社マルハン	15,965
合計	16,120

(ロ) 期日別内訳

期日	金額(千円)
平成28年4月満期	16,120
合計	16,120

ハ 売掛金

(イ) 相手先別内訳

相手先	金額(千円)
ジェイ商事株式会社	56,652
株式会社王将フードサービス	10,394
株式会社トヨテック	7,074
株式会社鹿島アントラーズ・エフ・シー	6,264
平和商事株式会社	1,987
その他	29,874
合計	112,245

(ロ) 売掛金の発生及び回収並びに滞留状況

--	--	--	--	--

当期首残高(千円)	当期発生高(千円)	当期回収高(千円)	当期末残高(千円)	回収率(%)	滞留期間(日)
(A)	(B)	(C)	(D)	$\frac{(C)}{(A)+(B)} \times 100$	$\frac{(A)+(D)}{2} \div \frac{(B)}{366}$
198,386	797,544	883,684	112,245	88.7	71.3

(注) 消費税等の会計処理は、税抜方式を採用しておりますが、上記金額には消費税等が含まれております。

八 商品及び製品

区分	金額(千円)
ポールビジョン大型	24,104
サイバービジョン屋外	83,397
A-Line	5,749
DPS-150	62,390
その他	7,371
合計	183,013

二 原材料及び貯蔵品

区分	金額(千円)
ポールビジョン大型部材	8,563
サイバービジョン屋外部材	38,992
サイバービジョン室内部材	4,446
A-Line部材	1,317
ix-board部材	1,436
DPS-150	7,858
その他	800
合計	63,416

b 負債の部

イ 支払手形

(イ) 相手先別内訳

相手先	金額(千円)
アンデス電気株式会社	9,571
真栄工芸株式会社	1,008
三和ネオン電機株式会社	331
TDKラムダ株式会社	324
合計	11,235

(ロ) 期日別内訳

期日別	金額(千円)
平成28年4月満期	5,872
平成28年5月満期	2,805
平成28年6月満期	664
平成28年7月満期	1,893
合計	11,235

ロ 買掛金

相手先	金額(千円)
株式会社ジャストコーポレーション	3,073
株式会社セキネネオン	979
株式会社VTM	648
株式会社ライフパック	777
アンデス電気株式会社	774
その他	10,518
合計	16,772

(3) 【その他】

当事業年度における四半期情報等

(累計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当事業年度
売上高 (千円)	156,401	338,391	531,690	739,157
税引前四半期(当期)純損失金額() (千円)	33,566	53,654	66,590	114,156
四半期(当期)純損失金額() (千円)	33,813	54,147	67,330	114,460
1株当たり四半期(当期)純損失金額() (円)	1.46	2.34	2.91	4.95

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
1株当たり四半期純損失金額() (円)	1.46	0.88	0.57	2.04

第6 【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	4月1日から3月31日まで
定時株主総会	6月中
基準日	3月31日
剰余金の配当の基準日	9月30日、3月31日
1単元の株式数	100株
単元未満株の買取り及び買増し	
取扱場所	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番5号 三菱UFJ信託銀行株式会社 証券代行部
株主名簿管理人	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番5号 三菱UFJ信託銀行株式会社
取次所	
買取手数料	無料
公告掲載方法	当社の公告方法は、電子公告としております。 ただし事故その他やむを得ない事由により電子公告をすることが出来ないときは、日本経済新聞に掲載しております。 当社の公告掲載URLは次のとおりであります。 http://www.avix.co.jp
株主に対する特典	該当事項はありません。

- (注) 1. 当社の株主は、その有する単元未満株式について、次に掲げる権利以外の権利を有しておりません。
- (1) 会社法第189条第2項各号に掲げる権利
 - (2) 会社法第166条第1項の規定による請求をする権利
 - (3) 株主の有する株式数に応じて募集株式の割当て及び募集新株予約権の割当てを受ける権利
 - (4) 株主の有する単元未満株式の数と併せて単元株式数となる数の株式を売り渡すことを請求する権利
2. 平成28年6月30日付けで株主名簿管理人の変更いたします。
- 株主名簿管理人 東京都中央区八重洲一丁目2番1号
 特別口座の口座管理機関 みずほ信託銀行株式会社

第7 【提出会社の参考情報】

1 【提出会社の親会社等の情報】

当社には、金融商品取引法第24条の7第1項に規定する親会社等はありません。

2 【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

(1) 有価証券報告書及びその添付書類並びに確認書

事業年度 第26期(自 平成26年4月1日 至 平成27年3月31日) 平成27年6月30日関東財務局長に提出。

(2) 内部統制報告書及びその添付書類

平成27年6月30日関東財務局長に提出。

(3) 四半期報告書及び確認書

第27期第1四半期(自 平成27年4月1日 至 平成27年6月30日) 平成27年8月14日関東財務局長に提出。

第27期第2四半期(自 平成27年7月1日 至 平成27年9月30日) 平成27年11月12日関東財務局長に提出。

第27期第3四半期(自 平成27年10月1日 至 平成27年12月31日) 平成28年2月10日関東財務局長に提出。

(4) 臨時報告書

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2(株主総会における議決権行使の結果)の規定に基づく臨時報告書

平成27年7月1日関東財務局長に提出。

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第4号(主要株主の異動)の規定に基づく臨時報告書

平成28年5月16日関東財務局長に提出。

第二部 【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

平成28年6月29日

アビックス株式会社
取締役会 御中

有限責任監査法人 トーマツ

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 由 水 雅 人

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 倉 本 和 芳

< 財務諸表監査 >

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられているアビックス株式会社の平成27年4月1日から平成28年3月31日までの第27期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、キャッシュ・フロー計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、アビックス株式会社の平成28年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する事業年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

< 内部統制監査 >

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、アビックス株式会社の平成28年3月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

内部統制報告書に対する経営者の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した内部統制監査に基づいて、独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準は、当監査法人に内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき内部統制監査を実施することを求めている。

内部統制監査においては、内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための手続が実施される。内部統制監査の監査手続は、当監査法人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。また、内部統制監査には、財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、アビックス株式会社が平成28年3月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、すべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

-
- (注) 1 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社(有価証券報告書提出会社)が別途保管しております。
- 2 XBRLデータは監査の対象には含まれていません。